

やまみやじんじや たう ぎょうじ やすらじんじや たう ぎょうじ  
**山宮神社のお田植え行事と安楽神社の田打ち行事**

〔別 名〕山宮神社田植え祭り・安楽神社打ち植え祭り

〔伝 承 地〕志布志市志布志町安楽

〔実施時期〕毎年二月第二土曜日・日曜日

〔実施場所〕安楽集落内と山宮神社・安楽神社

〔伝承組織〕安楽正月踊り保存会と山宮神社・安楽神社

〔名称〕

山宮神社でお田植え行事、安楽神社で田打ち行事を行うので合わせて「山宮神社と安楽神社の春祭り」とも安楽集落内では言っているが、ここでは「山宮神社のお田植え行事・安楽神社の田打ち行事」とする。

〔実施時期〕

戦前までは旧暦正月卯の日に山宮神社で、翌日の辰の日に安楽神社で行われていたが、その後、新暦二月一七日に山宮神社、翌日一八日に安楽神社で行っていた。現在は二月第二土曜日に山宮神社、翌日の日曜日に安楽神社で行っている。

〔実施場所〕

安楽集落（校区）内と山宮神社、安楽神社で行う。山宮神社で午前中行事儀礼（田植え行事、浜殿下りなど）を行い、午後から校区内の各集落を二つに分けて正月踊りを奉納（披露）してまわる（庭まわりという）。夕方までに庭まわりが終わらなかった集落は、翌日の午前中と安楽神社での田打ち行事などが終わった後庭まわりをする。

〔伝承組織〕

安楽校区公民館長が正月踊り保存会長を兼務し、安楽校区の公民



山宮神社及び安楽神社周辺



田の神問答

館各自治会会員（小学生・中学生・高校生など）と山宮神社・安楽神社で伝承組織を構成し、細かく部所を分け、それぞれ担当協力しながら行事などを伝承している。

#### 「由来・伝承」

山宮神社は志布志市の旧郷社で祭神は天智天皇、弘文天皇、持統天皇、乙姫宮、倭姫、玉依姫で古くは山口六社大明神と言っていた。安楽神社は山宮神社から南に約二キロメートル位離れたところであり、旧村社で明治初期の神社統廃合で沈母（鎮母・倭姫）社、一宮（市神社）、年神社、稲荷社（宇気母知神）、於久呂社（於久呂大明神）の六つが合祀され、祭神は倭姫、玉依姫である。

戦前までは、旧暦正月卯の日に山宮神社の「お田植祭り」、その日のうちに山宮神社から神輿が安楽神社におくだし、その翌日の辰の日に安楽神社で「田打ち行事」が行われ、祭りが終わると神輿はその日のうちに山宮神社へ還った。現在は二月第二土曜日に山宮神社で「お田植え祭り」や「浜殿下り」などが行われ、翌日、山宮神社から神輿が安楽神社に送り出し、安楽神社で「田打ち行事」が行われた後、神輿は山宮神社へ還るといふふうになっている（写真1）。



写真1 山宮神社



写真2 四つ角や辻に立ててあるシメ縄

祭りは二日間にわたり、それぞれの神社で行われその年の豊作を祈願する祈年祭であり、神輿のおくだしがある。二つの祭りは重複する祭りは見られないことから一連の祭りとも一緒に記述する。

この祭りには「正月踊り」が奉納される。この踊りは別名を「手拍子（テベス）」と言う。一つの踊りではなく、「出羽」、「お市後家女」、「一つとの」、「帖佐節」、「塩谷判官」、「坊様節」、「五尺」、「安久節」の八つの踊りで構成されている。

#### 「実施内容」

山宮神社と安楽神社の祭りを、一連の祭りとして順を追って記述する。二つの神社までの集落内の角々に、笹竹に注連縄と御幣を付けて立てる（写真2）。この竹は苦竹で御幣は八本付けるのが本来の姿で、注連縄は八の字にして掛ける、これは願掛けと願戻しを意味している。以前は、安楽から松山までの分かれ道で迷わないように注連縄を張っていたが、舗装道路になってから角々に立てるようになった。

### 1 山宮神社

#### （1）神事

神社神殿及び拝殿で神事が行われた後、「降神の儀」が拝殿前の境内に設えられた「清浄の地」で行われる。

この「降神の儀」には神輿に検非違使が警護として付く。

#### （2）お田植え行事

神官を先頭に神殿を一周し、神殿後方脇に四角に囲んでシラスを入れた「お田」の前で「お田植え行事」が行われる。お田植え神事後、苗に見立てた竹に紅白の紙を挟んだものを、一本ずつ受け取りお田に植えていく。神官や神社関係者のあとに見学者も参加する。お田植えが終わった後、また、神殿を一周してお田植え行事は終わる（写真3）。



写真3 田植行事



写真4 田の神問答

### (3) 田の神参拝

拜殿に於いて田の神夫婦と氏子総代による五穀豊穰・豊漁・無病息災と今年の恵方問答が行われる。

男の田の神は大きなメシゲを左手に持ち、竹筒の宝物を肩にかけている。女の田の神はシャモジとスリコギを手に持ち、拜殿に入ると持ち物を降し座って問答を始める。

問答は氏子総代が面白おかしく社会情勢や農作物などについて、方言とアドリブで挨拶をかねて行い、男の田の神に湯呑み茶碗に入れた御神酒(焼酎)を勧めると、女の田の神が手助けして飲ませる。次に女の田の神に御神酒を勧め、氏子総代にも勧める。このような所作を繰り返しながら問答を行い、最後に氏子総代が今年のアキホ(恵方)を尋ねる。ちなみに二〇一七年のアキホ(恵方)は北北西であった。

この田の神問答は氏子総代が問いかけ、田の神は終始無言で、時々男の田の神が大きなメシゲを振り上げたり、床をメシゲで叩いたりして問答を表現している(写真4)。

### (4) 正月踊り

地元住民は「手拍子(テベスまたはテベシ)」といっている。この踊りは水神踊り、八月踊り、川踊りとも言い、水神祭りの時に奉納される踊りであるが、いつの間にか春祭りにも正月踊りといっているようにもなった。

正月踊りでは楽屋である「ヤマ」が設えられる。「ヤマ」は神垣のことで、椎の木と杉の葉で垣を作り、カラタケと椎の木を蔓で留める。天井には薄い布を張ってある。前方には注連縄を張り結界を付けてある(写真5)。

この「ヤマ」の中には踊り集団を指揮する太鼓、鉦、三味線(未婚者も含む)、唄者が数人入っており、踊りの全てを指揮・進行する。この方々は正装の紋付き羽織で三味線(未婚も含む)の方も正装の和服である。しかし現在は、必ずしも紋付き羽織でなくても、また、男性は洋服でもよいことになっている(写真6)。

(写真6)。

踊りの演目は八つである。この正月踊りは神社での奉納の後、午後から安楽校区の各集落の公民館などで「庭まわり」として披露して回る。



写真5 ヤマ(楽屋)



写真6 正月踊り

この正月踊りは元々、安楽地区の上・中・下の三つの集落が、それぞれ九つずつの踊りを持って踊っていたが、昭和四九年に安楽地区として一つになったので、九つずつ三集落が持ち寄り二七の踊りを各集落三つずつに絞り現在の九つになったと言われている。

踊りの服装はオコソ頭巾・紋付き羽織・黒足袋・脚絆・股引・手

甲・帯・下駄で豆絞りの手拭を腰に下げ、猿の子人形を下げています。この猿の子は女性（母・姉妹・妻・恋人）からの贈り物である（写真6）。

(5) 浜処下り

山宮神社から神輿が猿田彦面を先頭に宮司、神官による楽、鉦、幟旗、弓矢、檢非違使などに警護されながら氏子総代、参加者などの行列で田之浦の御在所岳にある天智天皇廟を遥拝するために、山宮神社の正面約一〇〇メートル位東に行ったところにある「浜殿」まで行く。神輿を「浜殿」の台座に置き、そこでの神事後、再び神輿の行列は山宮神社へ還る（写真7・8）。



写真7 浜処くだり



写真8 浜処に置かれた御輿

行きには獅子は同行していないが、帰りには獅子が加わる。それは、田之浦御在所岳まで行ったので「御在所狩倉」でシシ狩りをしたお土産であるとの意味がある。

(6) 獅子舞い

帰路同行した獅子による「獅子舞い」が山宮神社鳥居前で奉納される。獅子は赤い衣装を纏い、舞いを奉納する。この舞いは正月に獅子舞いをする元気な獅子とは異なり、狩りで射止められた獅子を表現しているので、弱々しい獅子の姿で舞う（写真9）。

(7) 庭まわり

集落内に楽の三味線、鉦、大鼓、唄者を先頭に正月踊りを披露して回る。集落内での正月踊り披露は一日では終わらないが、一日目はいくつかの集落は二つに分かれて回ったところもある（写真10・11）。その日の最後は山宮神社に帰って「庭戻し」をする。翌日も時間を見ながら全集落を披露して回り、最後は山宮神社で祭り全体の「庭戻し」をする。



写真9 シシマイ



写真10 庭まわりで集落へ向う



写真11 鉦

各集落で披露して回るたびに、それぞれの自治会でもてなしが行われる。また毎年、集落独特のもてなし料理が出されるところがあり、皆が楽しみにしている。そのもてなしの一例をあげると、手打ちそば、天ぷら（ガネという）、揚げ餅（この日のために餅を搗く。）など、そのほか子どもたちへのお土産、お茶・お菓子など盛り沢山である。

## (8) タマゲ祭り

山宮神社で行われる二日目の行事で午前中に行われる。

神社境内の天智天皇に由緒ある御神木の太楠があった跡地に御幣を立て聖域を作られて行われている。

榊の根元を白い紙で包んだハナと小さな餅(タマ)を供える。



写真 12 タマゲ祭り

神官が御幣を捧げ「ハナ、ハナ、袖のハナ」と唱え、左右に三回交互に舞い、続いて楽役の神官が同様に舞いながら後の句「幾代のハナも つもりあるらん」と唱える。そして、神官は白餅を捧げ持ちタマを供えるときの句「タマ、タマ、袖のタマ」と唱えながら左右に三回交互に舞い、楽役も太鼓の撥を捧げ持ち同様に舞いながら「幾代のタマも つもりあるらん」と唱える(写真12)。

最後に神官は白餅に「霊餅は霊餅」と唱えながら祀り終わった後、ハナもタマも集まった人々に分ち与える。このタマを食べると健康になり、ハナは保存して種降しのときに水口に立てると稲に虫がつかないという。

## (9) 神輿のおくだり

以前は、山宮神社での祭事後、その日のうちに安楽神社へ猿田彦面を先頭に行列を組んでおくだりしていたが、最近は翌日の午前



写真 13-1 神輿のおくだり①



写真 13-2 神輿のおくだり②

中に猿田彦面も神輿もトラックで安楽神社へ向かう(写真13-1・13-2)。

## 2 安楽神社

午後から神事が執り行われ、引き続き次のような田打ち行事などが行われる。

### (1) 田の神参拝

田の神と氏子総代が即興で挨拶や世間話を繰り広げながら御神酒を汲み返す。

田の神も氏子総代も前日の山宮神社での田の神参拝の人とは別人であるが、持ち物は同じである。田の神と氏子総代の問答もアドリブで行うので、その時にどのようなやり取りをするかは誰にもわからない。アキホ(恵方)だけは同じく北北西であった。

### (2) 田打ち行事

安楽神社境内に籬を敷き田に見立て、白面に笠を被り木の鍬を担いだ作男が鍬で田や畦拵えをする。

この最中に白い面を付け、緋の着物を着、手拭いを被ったお産前の女性(アネボ)が握り飯の入ったムロフタを頭に載せ登場する。登場する途中で着物の裾から白い丸いものを落とす。これが早く落ちると安産で豊作だと言われている(写真14)。

### (3) 牛呼びと田よみ

牛使いと赤牛が登場する。作男が牛を呼ぶと親牛について子牛も一緒に現れるところ狭しと三匹の牛が暴れまわる。牛使いがモガ(馬鍬)を持って現れ、親牛にモガを取り付け田よみをする(写真15)。



写真 14 田打ち行事



写真 15 牛呼びと田よみ



写真 16 鍬での田打ち



写真 17 カギヒキ

(4) 種粃まき  
神官が三宝に種粃を入れ捧げ持ち、田に見立てた場所で四方に種粃を蒔く。種粃蒔きが終わると、境内に敷き詰められた籐の片付けが始まる。

(5) カギヒキ  
安楽校区を上・下の二つに分け三人ずつの青年たちが登場する。長さ約二メートルのカギ型の木製鍬(木の枝を利用して鍬に見立てたもの。)を青年たちが一本ずつ持ち拝殿前に並ぶ。

拝殿には宮司・神官・氏子総代など神社関係者が、笹竹を一本ずつ持って並んでいる。拝殿の宮司たちは「改まる年 立ち返り 空見れば 年乞い召され 今はふるとも」と唱えながら笹竹を振り下ろす。向かい合った境内にいるカギ(木鍬)を持った青年たち六人はカギ(鍬)を一斉に高く上げて振り下ろし土を打つ、という動作を三回繰り返す。三回目が終わると、素早く一対一で三組がそれぞれ引っ掛け合い引き合う。一組がカギを引っ掛け引き始めると、そこに寄り集まって加勢しながら引き合う。上が勝つと五穀豊穰、下が勝つと大漁となる(写真 16・17)。

(6) お田植え舞い  
カギヒキが終わると拝殿で神官たちによる「お田植え舞い」が奉納される。

神官一人ひとりが右手に鈴、左手に白い紙で包んだモロムギの実

の付いている小枝を束ねたものを持って舞う。実の付いているモロムギは稲穂を表す。舞いが終わると見物客がモロムギを貰い豊作と無病息災を祈願し水口に立てる。

お田植え舞いの歌詞

「この苗は 誰が取る苗 三つ葉さす苗よ 四つ葉になればとんと栄えまする」

(7) 正月踊り

正月踊りは前日の山宮神社と同じである。全集落内の庭まわりが終わると山宮神社へもどり庭もどしを踊る。

【意義・考察など】

一つの校区で二つの神社の祭りを一連の行事として絶えることなく伝承し、さらに将来に向けて小学三年生から子どもたちも参加し、伝承していることは大変意味深いことである。

【参考文献】

- ・小野重朗 一九九三 『南日本の民俗文化 IV 祭りと芸能』 第一書房
- ・小野重朗 一九六二 「山宮神社春祭・安楽神社打植祭」『鹿児島県文化財調査報告書第九集』 鹿児島県教育委員会

(牧島 知子)

〔別 名〕 神能面渡御祭

〔伝 承 地〕 鹿屋市田崎神社

〔実施時期〕 二月一七日

〔実施場所〕 鹿屋市祓川地区

〔伝承組織〕 宮委員（田崎各班より一人）

〔名称〕

「鹿祭り」とも「神能面渡御祭」とも言う。祭りの性格が初狩神事であることから「鹿祭り」と称されたのであろう。神社の案内板に「神能面渡御祭」とも標記されているが、これは「一の王」と呼ばれる神王面が巡行することから来た名称であろう。巡行する神面を「神王面」というので「神王面渡御祭」が正しい標記であろう。祭礼のお旅所を「シンノウ松」とも言うが、これは神王面巡行のお旅所が松林があつた所からそう呼ばれるようになったのだらう。

〔実施場所〕

田崎神社は、鹿屋市田崎地区にあるので「田崎神社」と言うが、この神社の正式名称は「七狩長田貫神社」である。この神社は七地区の狩長と呼ばれていたようで、神社の性格を示している。

鹿祭りは、初狩神事の祭礼で、現在は、打馬・郷之原・西祓川・大浦・新栄町地区五か所のお旅所（領域内の聖地）を巡行する。郷之原は氏子二人が早朝に参拝するので巡行は省略している。

「鹿祭り」以降に狩猟解禁になると伝承され、かつては巡行先のお旅所で野火を焚いていたとも伝わっている。



祓川地区周辺



神社を出発する一行

### 〔伝承組織〕

宮司・伶人二人（太鼓・笛）氏子総代・宮委員（上田崎地区約八〇〇戸住民を一八班に分け、各班から一人ずつ氏子代表を決める。）。現在は他所からの移住者が多く宮委員の欠員班があり、現在の宮委員は一〇人である。

### 〔実施時期〕

田崎神社の「鹿祭り」は、二月一日（元は旧一月十一日）の「柴刺し」から始まり、一七日の「鹿祭り、神王面渡御祭」、二月二日の「田打ち神事（打植祭）」までが一連の祭祀。



写真1 参列者に授ける弓矢

1 **柴さし** 二月一日、氏子二人が郷之原の「田崎神社祭典用神柴植林地」と札が建てられている山地から祭り用の神の枝を切ってくる。この神柴は、水につけて十七日まで活かして置く。これを現在では「柴刺し」と言っているが、元の「柴刺し」の様子は不詳。その夜から一七日までの間は、慎まなければいけないと伝承されている。

2 **夜狐の神** 二月一六日、夕方七時以降、ワラ人形を、境内に鳥居から本殿に向って（頭の部分を本殿側にむけて置く）、ワラ人形には御幣のついた神袖を両手・両足・胸元に突き刺して置く。このワラ人形を「ヤコ」と言う。野狐のことなのだろうか。人を呪うワラ人形だとも言われている。鹿祭り前日の夕方六時頃に置かれたこの「ヤコの神」は二五日の打植祭りの前夜までそのままにして置く。このヤコは二月二日夜（翌日は田打ち神事が行われる。）に撤去する。

### 3 鹿祭り、神王渡御祭

二月一七日、田崎神社の神様が、領域内を巡行して、各地区のお旅所で祭典を行い、その後地区民と直会をする。これ以降は狩猟をしてよいと言われている。祭礼に臨んだ地区民には模擬の弓矢が授けられる。弓は境内に植えられている萩で作る。



写真2 ヤコの神

4 **田打ち神事** 二月二日、神社境内で打ち植え祭りが行われる。牛と七人の農夫が出て、田打ち神事を行う。

### 〔実施内容〕

平成二八年の鹿祭りの様子を、時間経過に沿って記していく。

1 **午前一〇時** 祭典開始。玉串奉奠・神輿に御霊遷し・午前一〇時半に旗・太鼓・一の王と呼ばれる神王面（長さ一・八メートルの矛棒に吊り下げられた「一の王」と呼ばれる神王面が巡行する。この神王面は、神の依り代面と考えられ、神聖視されている。）・神輿・神柴の順に神社を出発。鳥居の外に止めていた軽トラックに神輿、太鼓、神王面等に乗せて巡行する。現在は軽トラックと、宮人たちを乗せた小型バスで巡行する。元は、宮司と神王面は馬に乗り、ほかの人たちは徒歩で巡行、一日がかりの祭事であったという。

2 **午前一〇時四五分** 打馬地区のお旅所がある早馬公園に到着。早馬公園は昭和四七年に土地改良事業で現在の場所に造園された。以前のお旅所は現早馬公園近くのコマツ山にあった。コマツ山にあった頃、祠はツカヒラと言う高隈連山の山を拝む方向にあった。昔は、ツカヒラ山に行っていたとの伝承がある。早馬公園では神輿を降し、祠に一の王の神王面を立て掛けて神事を行う。神事は、神主

の祝詞の後に住民代表・打馬地区町内会長・神社から巡行してきた田崎地区町内会長・市議会議員・神社代表などの玉串奉奠などを行う。神事が済むと打馬地区の住民達と直会を行う。この直会にはかまぼこが必ず出る。祭りに参加した人は、男は山草履、女は糸を持参し奉納していたというのが今はしていない。参列した地区の人たちには弓と矢が与えられる。

### 3 正午 西祓川地区の外園にあるお旅所に到着。昭和四〇年代までは、郷之原山中にお旅所があったが、遠くに行くのが大変だったので長谷口の森に移したという。昔はこの一帯は松林だったので、ここを「シンノウマツ」と呼ぶようになった。祭典では、宮司が「西祓川の鹿祭りをを行います。」というふうな祝詞をあげ、その後西祓川町内会長・町内三班の各班長・市議会議員・田崎町内会長・神社代表の玉串奉奠などを行い、祭典が済むと、直会となる。祭りに参加した人々に弓矢を授ける。神社境内の平成一五年設立の説明板には、「一の王（田崎神社の神様）を騎馬で奉持して、神職、氏子総代、狩人、付添人たちを従えて、笛を吹きながら西祓川の外園まで御神幸になり、ここで神様が野火をつけ、



写真4 打馬地区早馬公園での祭礼



写真3 神社を出発する一行

シカ狩をされた。」と記述がある。野火をつける神事は現在行われていない。

4 午後一時半 大浦地区のお旅所に着く。平成一〇年頃までは、地区住民が迎え直会まで行っていたが、平成二八年は近くに住む高齢の夫人が一人参列するだけだった。元は直会に里芋の味噌田楽が出た。今は直会もない。この神事が済むと、本来なら郷之原にあるお旅所に行くのだが、ここ数年は省略している。

5 午後二時 新栄町の桜公園の片隅にあるお旅所に寄り、車から神輿や神王面を下ろして、神社から来た一行だけで神事を行う。このお旅所を、ここでも「シンノウマツ」と呼んでいる。

6 午後二時半 神社に帰着し、神輿から神を移す儀礼を行い、祭りは終了する。

#### 「意義」

狩長と名乗る神社は、大隅半島各地に点在している。鹿屋市細山田の馬掛け集落の「狩長田貫神社」、田代麓の「狩長神社（北尾神社に合祀されている。）、錦江町池田の「狩長神社（旗山神社の神殿の中に



写真6 大浦地区お旅所



写真5 打馬地区民の直会

社が安置されている。」などである。これらの狩長神社は、正月の「柴の口開け祭り」に狩猟の口開け神事を行うということが共通している。

『三国名勝図会』に肝付町内之浦高屋神社は「正月四日、狩初の祭り、王の面を守、狩長へ渡御於、狩長初狩之祈願アリ」と記述があり、初狩神事が行われていたことが判る。

「狩長神社」の存在は、今のところ大隅半島に偏って存在しているようだ。

大隅半島に残る「柴祭り」と、鹿屋市七狩長田貫神社の「鹿祭り」は、同じような「狩猟事始め」の祭りのようである。

「柴祭り」は、大隅半島の国見山系と高隈山山系の周辺集落で、正月の始めに、柴神を奉持した神官が、地区内を巡行して、「事始め」神事を行う祭りで、年の始めに際し、臼の口開け、農作業の口開け、狩猟の口開け、仕事の口開けなどと各種の「仕事始めの儀礼」を行うという極めて古い祭りである。

この田崎神社の「鹿祭り」は、かつては男が草履、女は糸を神様にささげる風習があったという。これは、仕事始め儀礼の名残りであろう。戦前までは、巡行先で野火を焚き、狩猟の口開け神事も行われていたという。今も狩猟の口開けの祭礼だという伝承は残っており、この祭り以降に狩猟が解禁されるとの伝承が残っている。祭りに参加した人々に、萩の枝で作った模擬の弓矢を授ける事は今も行われている。

狩猟解禁やその他の口開け神事は、今日の生活とかけ離れた祭りになってしまい、地元住民との親睦を深める直会のみが祭りの主目になっている。鹿屋市新栄町のお旅所は都市化した市街地の中の



写真7 新栄町お旅所（シンノウマツ）

公園にあり、公園の片隅に「七狩長田貫神社鹿祭りお旅所（しんの松）」書かれた立札が残っている。地元の参列者は誰もいない。大浦地区で二五年前に祭りを見学した時は、地区民が十数人参加して、直会には伝統の里芋の味噌田楽が振舞われていたが、平成二八年は、老夫人が一人参列しただけであった。

関係者の呼びかけによって打馬地区と西祓川地区では、直会にまだ十数名参加し祭りが続行されている。現在この祭りは形骸化してしまっている。この貴重な狩猟祭祀が、いつまで続くのだろうか。

（出村 卓三）

#### 【参考文献】

『三国名勝図会』 上巻・下巻 一九六八 南日本出版文化協会

〔別 名〕十九日（ジユクニツドン）、二十日祭り

二十日市（ハツカマツイ・ハツカイチ）

〔伝承地〕南大隅町佐多地区

〔実施時期〕二月一九日に近い土曜日・日曜日の二日間

〔実施場所〕南大隅町佐多地区

〔伝承組織〕佐多の御崎祭り保存会

### 〔名称〕

佐多地区佐多岬（御崎山）の御崎神社から郡集落の近津宮神社までの浜下り行事（神事）のことで、総称して御崎祭りと言っている。

古くは二月一九日に御崎神社を出発し、海岸沿いの集落を回って郡集落まで行っていたので各集落の人々は、「ジユクニチドン」が来ると言ったり「お通りが来る（オトリーガクツドー）」と言った。

翌二〇日は「ハツカマツイ」とか「ハツカイチ」と言って近津宮神社の春祭りと二十日市が開かれ、祭りを見に来た人々で賑わっていた。現在、市（いち）は旧郡小学校校庭にわずか数軒の店がでるだけになった。

### 〔実施場所〕

南大隅町佐多地区、主として佐多岬近くにある御崎神社から海岸沿いの七つの集落を通って郡集落の近津宮神社までの各集落と二つの神社で行われる。

### 〔実施時期〕

毎年二月一九日・二〇日に近い土曜日・日曜日の二日間行われる。

以前は、一九日・二〇日が平日であっても行われていたが、神輿を担いで各集落を回り神社までの約二〇キロメートルを歩いたり、



御崎神社周辺



ミサキシバに還した御霊を捧げ持ち御崎神社を出発

また、各集落間をトラック搬送になってからも、若い担ぎ手が仕事のため平日に休めなくなると祭りが成立しなくなることから、土曜日・日曜日の二日間に実施せざるを得なくなった。

### 【伝承組織】

佐多の御崎祭り保存会が中心となり、小中学生や高校生、各集落の人々も積極的に協力し、祭りを行っている。

### 【由来・伝承】

神社は一三〇〇年位前からあり、祭りは江戸期から続いている。御崎山の中腹に御崎神社があり、祭神は伊邪那岐命、伊邪那美命の二神と御子を祀っている。

伊邪那岐命が日向より大隅国南端佐多岬へご降臨され、岬突端大輪島海辺の「おほごの瀬」で禊祓いされ、御子命にここで八洲を守護とのことを命ぜられたと古い伝えが残っている。

祭神や祭りについては『三国名勝図会』に次のようにある。

「(略) 祭神三座、底津少童命・中津少童命・上津少童命、即海神也、住吉大神也、是なり、一説に、六所権現と称して祭神六座とす、六座の祭神は、下條近津宮と同じ社内に鏡あり、(中略) 正月十九日には、濱殿下りの祭式あり、本社より神輿を昇ぎ、當邑海邊の田尻浦・大泊・外の浦・間泊浦・竹之浦等處々に神輿を駐めて祭りをなし、近津宮の下に神輿を案じて置いて、翌二〇日、近津宮の庭におひて打植祭あり、廿一日、送神せり、(以下略)」

地域の人々には「オミサキドン」とも呼ばれている。

慶長の頃、薩摩藩から琉球に出征するとき、御崎神社に参拝祈願して琉球に出航した。社殿は南向きである。これは、琉球が治まるようにとの願いから南向きにしたと伝えられている。

神社は造ったが参拝者が少ないので、島津藩が長州藩から遊興をしたらよいと教えてもらい、郡に近津宮神社があり、もともと御崎神社の六神の内の三神を分神して祀ってあったので、御崎神社の神

様(妹神あるいは弟神との二つの伝えあり)が年に一回近津宮神社の女神(姉神)に正月の挨拶のため会いに行くということで巡行をするようになった。

ミサキシバに御霊を移すのは、御崎神社は御崎山の中腹にあり、ここには神の霊力があるというミサキシバがある。御崎神社に参拝した人はこの枝を折って持ち帰れば、あらゆる災いを払い除けるといふ伝えがある。

佐多地区ではミサキドンの浜下りの日を「シバ日」と言い、古くは仕事も休むという大事な日であった。

神輿は近津宮神社から田尻集落に前もって届けてあり、ここから出発する。

銚は尾波瀬集落の青年団が持ち、傘は外之浦集落の青年団が持つように決まっている。

### 【実施内容】

二〇一七年は二月一八日(土)・一九日(日)の二日間に渡り行われた。一八日は御崎神社での神事後、佐多地区海岸沿い七つの浦(集落)へのおくだりと仮宿(御旅所)でのお泊りがあり、十九日は仮宿から近津宮神社へ向かい神社での神事、行事などが行われる。近津宮神社までの途中にある集落がお旅所となり、それぞれの集落での特徴あるもてなし料理が出される。集落によっては祭り関係者だけでなく、集落民や見物客にも、もてなし料理が振る舞われる。

### 1 御崎神社での神事

#### (1) 準備

明け方五時半頃から、祭り関係者が神社に集まり神事の準備を始める。辺りは真っ暗で参道に取り付けられた電灯と社務所、拝殿の灯りが頼りである。

#### (2) 神事と御霊遷し

関係者全員が集まった六時二〇分頃から神事が始まり、ミサキシバへの御霊遷しが行われた。御霊を遷したミサキシバは白い布で覆われ、神官が捧げ持つ。

神社境内で出発の神事が行われ、太鼓、笛を先頭に最初の田尻集落へ向かう。

御崎神社から最初の田尻集落（一の浦）へは、古くから道が険しく神輿を担いで行けなかったので、ミサキシバに神様（御霊）を遷し捧げ持つて行き、田尻集落で神輿に遷しかえるということを行っている。現在も参道は狭く、周りの木々も覆い茂っており、神輿を担いで歩くことは難しい。

### （3）集落に着くまでの途中での神事

参道を出た所の二か所で海に向かい航海安全祈願を、太鼓・笛に合わせて神官がご神体を捧げ持ち、お祓い、祈願、唱え唄を歌う。また、田尻集落に入る前の所で安全祈願の大祓いと唱え唄を歌う。おくだりの時にいくつかの唱え唄を官司が唱えるので、その唱え唄の一部を紹介する。

「きよどころ あそびさかえし かみのおまえで あやのそでふる」

「ちはやふる ここも たかまのはらなれば あつまひたまひしよよのかみがみ」

## 2 各集落へのおくだり（御神幸行列）

### （1）田尻集落（一の浦）

この集落では御霊（ミサキドン）遷しという大事な神事が行われる。御霊（ミサキドン）と神輿を置く場所が決まっており、そこにはアクジロという木を立て掛けてある。

このアクジロの木に神官が捧げ持つてきた御霊（ミサキドン）を括り付ける（写真1）。

神輿を台座の上に載せる。鉾で神輿の邪気を祓い、再び鉾先を神

輿に触れた後、神輿への御霊遷し（オシバ遷しとも言う。）の儀式が厳かに行われる。

鉾で神輿の邪気を祓うのはご神体であるミサキシバを神輿に遷すためである。



写真1 アクジロの木に掛けている御霊のミサキシバ

鉾の前に指揮棒を持った人がいる。この人は邪気を払い除けながら先導して歩いているので、この人の指図は絶対で、この人の前を歩いてはいけなないとわれている。

この集落でもてなしはナマス（カンパチ・大根を酢味噌で味付けしてある。）とおにぎりである。

### （2）大泊集落（二の浦）

大泊集落に入っすぐの所にあるホテル佐多岬に立ち寄り、ホテルの玄関先で宿泊客や従業員の出迎えを受け、鉾と傘でお祓いをする。

大泊集落では大久保と大泊浜という二つの集落に立ち寄る。大久保は農業を営んでおり豊穰を、大泊浜は漁業で豊漁を祈願する

#### ①大久保

広場に神輿を置く台座を白砂で造っており、ここを最初に鉾で清めてから神輿の台座を置き神輿を置く、この神輿に傘を触れる。集落の人々が神輿にお賽銭をあげに訪れる。

神事は神輿の前にゴザを敷いてそこで行われ、終わるともてなし料理が出される。農業の集落であるから魚はでない。ナマスは大根・海から取ってきたてのノリを酢味噌で味付けしてある。大根を出す

人、岩のりを取ってくる人が決まっている。

## ②大泊浜

「鉾・傘・神輿」が大泊浜の砂浜海岸を雄大に行列する様子は、この祭りの見どころのひとつである。鉾を一〇年位前から郡集落の人々と合同で持つようになった。

神輿を置く台座は海岸の砂を固めて作ってある。

もてなし料理はブリの刺身を出すのがこの集落の特徴であったが、最近では郡集落の男性たちが作って持ってくるようになった。今回は、おにぎり(炊き込みご飯・赤飯など)とくさんの具材を中に入れてたり、混ぜ込んだりしておにぎりを作った。唐揚げ、鯖の塩焼き、新じゃがいものから揚げ、こが焼、卵焼き、煮しめなどくさんの料理を重箱に詰めてあった。

## (3) 外之浦(三の浦)

古くから傘持ちを担当していた集落である。

この集落では子や孫、兄弟姉妹などの写真を持って祭りの行列を迎える。この集落を離れてよそで暮らす人々の健康や安全祈願のために、写真を持って参列し鉾・傘・神輿などで祓ってもらうためである。お神輿の行列が集落に入ると、皆写真を鉾・傘・神輿の方に向けてお祓いしてもらう。

ここでも神輿を置く台座を鉾で祓い神輿を置き、傘を神輿に触れお祓いして神事が執り行われる。

もてなし料理は吸い物椀が二つである。一つはかまぼこ・えび・しいたけ・ニンジン・うずら卵・青菜で、もう一つは魚の入った椀で、そのほか刺身、盛り皿である。神様へのお供え物は御神酒、フダン草、ネギ、刺身、米、塩などがある。

古くから小さな貝を取ってきて茹でて出していたが、一〇年位前から小さな貝があまり採れなくなり出さなくなった。小さな貝を出していた理由は、小さな貝は中身を取り出して食べるのに時間がか

かり、長く滞在していたので少しでも長く滞在してもらうためであった。

今は貝を出さないで料理を食べたらすぐ出発の準備を始めようとする、少しでも長く滞在してもらうために、まだ早いのでゆっくり休んでくださいなどと、引き留めようとしている。

## (4) 間泊(四の浦)

行列が見えると次の集落の竹之浦の子どもたちが神輿を迎えに行く。この神社は蛭子神社で社殿の前にソテツの幹を利用した鳥居がある。この鳥居の前に神輿を置く。鳥居の側に三匹の掛け魚をしてある。例年二匹(一对)を腹合せにして吊るしていたが、今年は何故か三匹にしたという。

## (5) 竹之浦(五の浦)

この集落では自治会長さんが道路の真ん中にゴザを敷きその上で正座して神輿を迎える。また、神輿を置く場所には田尻集落と同様にアクジロの木を立ててある。間泊に迎えに来ていた竹之浦の子供御輿の担ぎ手である子どもたちも神事に参加する。

ここでもてなし料理は祭り関係者だけではなく、見物客にもおにぎりや漬物、天ぷら、お茶などが配られる。神様へのお供え物は昆布、フダン草、ネギお神酒、米、塩などで神事に参加した人には刺身も出される。

## (6) 古里(六の浦)

古里集落では集落の中にある天乙神社下の空き地で祭りを行うので、笛や太鼓を先頭に神輿を担いで集落内まで歩く。以前は別の場所で行っていたとのことである。

もてなし料理はおにぎり、漬け物が集落民や見物客にも振る舞われた。供え物はお神酒・塩・米・イワシ・昆布・ほうれん草・バナナ・りんごなどである。

### (7) どんびらの坂くだり

古里集落から坂元集落に行く途中にある急な坂「どんびらの坂下り」がある。この祭りのおくだり(御神幸行列)では最大の難所であると同時に一番の見どころでもある。一時期中断したこともあったが、一〇年ほど前に復活し行われている。他の神輿回りと同様に行われるが、急勾配の山道のため雨の後などでは、特に神輿を担いでの坂下りは危険な上に大変である。

また、どんびらの坂というこのおくだりの中で一番の難所が、集落の裏の細く足元の悪い所で、集落の人々が坂の下まで行って、神輿が下りてくるのを見守っている(写真2)。

### (8) 坂元集落

坂元集落ではたくさんの人々が神輿が下りてくるのを待っている。

どんびらの坂を下りて来た神輿が着くと、すぐ鉾・傘・神輿などの神事が行われ、本日の仮宿である郡集落へ笛・太鼓を先頭に御輿の行列は歩いて向かう。



写真2 どんびらの坂

### (9) 郡集落

郡集落へ入った行列は出迎えの集落民へのお祓いの後、旧郡小学校跡地正門脇にあるセンダンの木の側に設えてある仮宿への御霊(ミサキシバ)のお泊りの儀式が行われる。笛・太鼓に合わせて最初に鉾で仮宿をお祓いし、神輿から御霊のミサキシバを遷す「御霊遷し」の儀式で、仮宿の入口には注連縄が張ってある。神官による御霊遷しの神事後、御霊(ミサキシバ)は仮宿へおさめられる。

## 3 近津宮神社

境内は注連縄を張り巡らせてある。

この神社の祭神は御崎神社と同じ三神(上津少童命・中津少童命・底津少童命)で右側に浜宮神社(祭神は事代主命)、真ん中に近津宮神社御子神(安産之神さま)、左側に山神(阿波畔三神命)の三神が合祀されている。

### (1) 仮宿から神輿への御霊遷しと鳥居くぐり

午後、神官による仮宿から神輿への御霊遷しの神事後、近津宮神社までの「お立ち」が始まる。

近津宮神社の鳥居くぐりが、まず鉾を先頭に厳かに行われる。くぐり方は鳥居に掛けてある注連縄を地面すれすれ(地面から約一〇センチメートル位の所)まで下に降り、この隙間に鉾の先をくぐらせ無事くぐらせたなら、注連縄を外し鉾が近津宮神社へと鳥居をくぐり抜けて階段をゆつくりと進む。鉾に続いて笛・太鼓・神輿・傘と順序よく進む。傘も注連縄を鉾と同様にくぐる。近津宮神社までは急な階段で途中急角度で左へ曲がるので、更にゆつくりと登っている。面を被った子どもたちが奉納旗を手に最後尾につく。面は四面あるが古い面は一面だけで、あとの面は無くなったため新しい面を使っている。

### (2) 近津宮神社での祭り

鉾を先頭に近津宮神社境内に着いた行列は、境内を時計回りに三回まわる。神輿が見物客のそばに来ると人々は我さきにとお賽銭を神輿に入れる。その後、神輿を置く場所(竹垣で囲ってある境内の一段高くなった所)を鉾でお祓いし神輿を置き神事を始める。神事が終わった後、打ち植え祭りが行われる。

### (3) 打ち植え祭り

打ち植え祭りは、農作業の様子を観客の笑いを誘いながら、次のような順序で演じられる。

① 田の草取り・・・蔓を田の草に見立て、時計回りに蔓をひね

りながら回る。

② 苗取り・・・田の草取りと同様の所作で行う。

③ 田打ち（田を耕す）・・・「ヨイヨイ ヨイヨイ ヨイヨイ、ヨイヨイヨイヨイ」と唱えながら、田を打つ所作を木で作った鍬で地面を叩く所作をする。

④ 牛が出てきて田を耕す所作をする。牛にマガ（馬鍬）を引かせ田を耕す。この時、牛使いと神職が即興で面白おかしく、色々なことを言いながらマガを牛に引かせ、最後に神職が牛を次々と褒めたたえる。

⑤ 種まき「権兵衛が種まきや ヨーイ ヨイ」と唱えながら種蒔きをする。

この後、子どもたちに餅を配る。

#### （４）神送りの儀式

近津宮神社での祭事が終わると、神様（御霊）を御崎神社へ還す儀式が行われる。御崎神社の神様は田植え行事が終わると還られると言う。

近津宮神社から下岳に飛び、ここで一泊し、そこから大泊岳にある神籠石（こうごいし）の所に飛ぶ。ここで休憩して歩いて御崎神社に還られる。御崎神社の神様（御霊）が下岳に飛んだ日から翌日までは、山に入ってはいけないといわれている。

神送りの時に「元の神社にお還りください。」という。ミサキシバに御鏡と麻、御幣を結び付けてある。この御鏡には御霊を遷してあるので御崎神社に還す。

#### 【意義・考察】

佐多地区では、この御崎祭りの神様に二つの言い伝えがある。一つは妹神が姉神に会いに行く。もうひとつは弟神が姉神に会いに行くという。このどちらも正月の挨拶に行くという事になっている。

御崎神社の神様を「ミサキドン」と言うことから「何々ドン」と

いうのは男性を表していると考え、兄弟（男神）とみてよいのではないだろうか。近津宮神社の神様は「お産の神様」と言われていることから女の神様とみると、兄弟（男の神様）の神様が姉妹（女の神様）に正月の挨拶に行くと考えてよいのではないか。

御崎神社の神様が近津宮神社から下岳に飛び、さらに神籠石まで飛んだ後歩いて還る、という祭りは「神様が空を飛ぶ奇祭」と言っても過言ではないと思う。

#### 【参考文献】

- ・佐多町誌編集委員会一九七一『佐多町誌』
  - ・高橋秀雄・向山勝貞編一九九八『祭礼行事・鹿児島県』（株）おうふう
  - ・武田篤志 二〇一五 「南大隅町佐多地区の『御崎祭り』にみる祭りの現在形」『地域総合研究』第四三巻一号 鹿児島国際大学
  - ・武田篤志 二〇一六 「南大隅町の場所文化とホスピタリティの可能性をさぐる」『地域総合研究』第四三巻二号 鹿児島国際大学
  - ・野田千尋 一九七六 『佐多岬』 渕上印刷
  - ・原口虎雄監修 一九八二 『三国名勝図会』 新潮社
- （牧島 知子）

14

ひろたじんじや はるまつ  
廣田神社の春祭り

〔別 名〕廣田神社の二月祭り

〔伝 承 地〕肝属郡東串良町池之原集落

〔実施時期〕二月第三日曜日

〔実施場所〕池之原集落と廣田神社

〔伝承組織〕池之原自治会、池之原下自治会

〔名称〕

一般的な名称は「廣田神社の春祭り」であるが、地元の方々は「廣田神社の二月祭り」と言っている。

〔実施場所〕

池之原集落の上西自治会と下自治会の二つの公民館で踊り、廣田神社で神事・棒踊り・カギ引き・田起こし・種まきなどの行事を行い、集落内の各家庭で棒踊りを夕方まで踊って回る。

〔実施時期〕

以前は二月二五日であったが、現在は二月第三日曜日に行われる。

〔伝承組織〕

東串良町池之原集落（上西自治会、下自治会）で伝承している。

〔由来・伝承〕

二月の祈年祭で豊穰を祈願する祭りであり、そのとき棒踊りが奉納され、カギ引きが行われる。

棒踊りは明治時代に谷山から伝わったと言われ、カギ引きは一〇〇年以上続いている神事である。



池之原集落周辺



奉納踊り

棒踊りについての由来などははっきりしないが、島津義弘公のとき朝鮮出兵の折に踊られたとか、島津光久公の時に示現流指南役の東郷重方が開拓工事の工夫激励のために、創案したという伝承もある。

古くは、女子と遺族は宮（神社）に行くことはできなかったという。

### 【実施内容】

池之原集落は、上西自治会と下自治会の二つの自治会がある。当日の池之原下自治会から神社までの様子、神社での行事、集落内の各家庭を回る様子をみる。

#### 1 池之原下自治会

池之原下公民館にカシの木の枝に御幣を付けた「ヤマ」と呼ばれるものを作った（写真1）。この木は以前「サカシバ（榊）」であったが、当日は長老の方だけが榊に御幣を付けたヤマを持ち、他の方々は「カシ」を持っていた。長老の方は自分のものは自分で切ってきたが他の木は誰が切ってきたかわからないとのことであった。



写真1 御幣をつけた「ヤマ」



写真2 ヤマを持ち神社へ向かう

公民館前に棒踊りの踊り子は正装し、棒を持ち歌いながら公民館

前で奉納する。自治会関係者はそれぞれ「ヤマ」を手に、踊り子たちと並んで神社に向かう（写真2）。この「ヤマ」は踊りを奉納するときは必ず後ろから付いて行く。

下自治会の長老の話によると、母親は長老の方が棒踊りで着た古い着物を現在でも大切に保管してあると言う。その頃は衣装は個人のものであったと言う。

#### 2 棒踊り奉納

池之原上西自治会と池之原下自治会それぞれの自治会が、次の順で唄を歌いながら踊りを奉納する。踊る順序は上西自治会（ケヤキ会）が先に踊り、その後を下自治会が同様に踊る。六人一組である。

(1) 神社鳥居前での奉納（写真3）。

(2) 社殿・拝殿をそれぞれの自治会ごとに唄を歌いながら踊り一周する（写真4）。

(3) 各自治会の各家庭へ踊って回る。



写真3 鳥居前での奉納



写真4 社殿横での奉納踊り

棒踊りの歌は「庭入り」、「棒踊りの歌」、「まつしま」、「薩摩歌」である。

歌のいくつかを紹介する。

「庭入り」

(歌い手)

さらば東西始まりまする

(どっこい)

(踊り手)

肥後の熊本勸進相撲よ

(どっこい)

年中ゆれたるお城のしばよ

(どっこい)

七十五間の虎落がゆれて

(どっこい)

虎落内には座敷がとれて

(どっこい)

座敷内には丸々方よ

(どっこい)

四方の隅には柱が立ちて

(どっこい)

柱巻きもの白地の木綿

(どっこい)

上に張りたる金襴緞子

(どっこい)

四方だー あらそいそい

(どっこい)

(歌い手)

んんだーあ、だあいーいい

いいかーわわ (大川ー)

「棒踊りの歌」は一四番までであるが、この日は次の四つが歌われ踊られた。

- ① おせろが山は、前は大川
- ② 横瀬のかめは、春田を打つ
- ③ きよめの雨は、パラリパラリと
- ④ 鎌のえが折れた、三把遅れた

「薩摩歌」これは五つあるが紙面の都合上一つだけ。

- ・ 朝早く、はるか彼方を眺むれば (そいそい)
- 一羽のカラスが飛んで行く (こりや)
- わしもあのようにね羽根があれば
- 飛んでいきたやぬしのそばへ (さのささ)

3 カギ引き

「棒踊り」に続き子どもたちによるカギ引きが境内で行われる。

カギ引きに使われる木は、葉付きの「カシの木」で雌雄一本ずつ用意する。豊作祈願と夫婦和合、青少年の士気を高めるという意味が込められている。

廣田神社では神の依代として葉付きの枝(カシ・シイ)を用いてカギひきをする。また、落葉樹であるニレ・榎・センダンなどを用いるのは、古くは葉をカシキとして使ったところからきている(写真5)。



写真5 カギ引き

4 田よみ

木製牛に木製のモガを引かせて田よみが行われる。

男性一人が牛を引き、もう一人が牛に引かせたモガを持って田よみを始める。この牛は木製で目鼻など彫りがはっきりしている。明治時代に作られたもので最初から車付き台車(写真6)に乗っていたという。

長い間使われていた牛とモガであるが、目や鼻などの彫りがしつかりしており、立派な牛である。



写真6 田よみ

5 種まき

神官による種まき行事。稲に見立てた榊を白紙で包み拝殿前の石畳の上に置き、その上からモミを撒いて行事は終わる(写真7)。

最後に鳥居前で二つの自治会は棒踊りを奉納する。ここまでで神社における奉納行事などは終了する。

## 6 各自治会家庭への棒踊り

各自治会ともこれから約一五〇軒ずつの家に棒踊りを踊って回るのであるが、昼食時間を挟んで夕方までかかって一軒一軒回る。留守宅であっても、例年のことであるから踊る。お礼の品々や祝儀は近所に預けてあるので、受け取って帰る。家々によっては上西自治会、下自治会の両自治会から踊ってもらうこともあるという(写真8)。

### 〔意義・考察〕

棒踊りを始める前に、古式ゆかしく「庭入り」の歌から入るところが最近少なくなっているが、この廣田神社では今でもそれを行っている。

棒踊りの棒は三尺棒と六尺棒の二種類を用いて踊る。

衣装は両自治会ともほぼ同じである。六尺棒を持つ人は紫色の頭巾を被り顔を隠して踊る。頭に白いハチマキ、水色の手甲と脚絆、水色と赤のタスキ、浴衣姿である。三尺棒を持つ人は豆絞りのハチマキ、赤い柄の着物、水色の手甲・脚絆、赤と黄色のタスキ姿である。

神社に踊りを奉納した後、各家庭を一軒一軒訪れて踊るという以前と変わらない行事を伝承していることは素晴らしい。後継者を育てる上でも常に毎年同じことを集落内の行事として、親子共々一日中踊り続けるということが特別なことではなく、ごく当たり前のこ



写真8 各家庭での棒踊り奉納



写真7 種まき

ととして、行事を伝承していくという気持ちを育成している。神饌も以前と今では大きく変わっている。

二〇一六年の供え物は米・粃・餅・野菜(白菜・大根・長ねぎ・ほうれん草)・塩・果物(みかん)・昆布・お菓子類・酒・水であった。

二〇年位前までは鶏(鶏肉のこともあった)・海苔・大豆・粟なども供えていたが、大豆・粟は作らなくなったため供えなくなったという。

明確な伝承・由来はわからないが、集落内が一体となって祭り・行事を伝承していくことの大切さを、特別なことではなく、ごく当たり前のこととして行っていることは貴重なことである。

### 〔参考文献〕

- ・東串良郷土誌編纂委員会編 一九八〇 『東串良郷土誌』 東串良郷土誌編纂委員会発行
- ・小野重朗 一九九四 『南日本民俗文化Ⅴ 薩隅民俗誌』 第一書房

(牧島 知子)

15

かごしまじんぐう  
 鹿児島神宮の「初午祭」  
 はつうまさい

- 〔別 名〕 鈴かけ馬踊り・十八日馬
- 〔伝 承 地〕 霧島市隼人町鹿児島神宮
- 〔実施時期〕 旧一月一日を過ぎた次の日曜日
- 〔実施場所〕 鹿児島神宮境内
- 〔伝承組織〕 初午祭実行委員会

〔名称〕

鹿児島神宮の初午祭は「鈴かけ馬踊り」とも呼ばれ、旧一月一日（現在は、一月一日を過ぎた次の日曜日）に行われ、鈴懸け馬の周辺を手踊り連が囲み、人馬一体となって神社の境内や街中を踊り回る祭りである。

この祭りは、馬の健康や多産祈願、豊作祈願の祭りであったのだが、現在は、商売繁盛・厄祓い、歳祝い等の目的で奉納されることが多くなっている。

馬踊りの奉納される期日から、鹿児島神宮の馬踊りを一日馬、始良市帖佐八幡の馬踊りを一九日馬、蒲生八幡の馬踊りを二〇日馬とも言う。

〔実施場所〕

鹿児島神宮の参道や境内で、鈴懸馬やその後続く踊り連一行の人馬一体となった踊りが披露される。

午前九時半、鹿児島神宮末社の保食神社で、始良市加治木町木田の御神馬がお祓いを受け、御神馬のお札と幟を頂く。その後奉納団体は次々に同神社でお祓いを受け、御神馬のお札と幟を頂く。御神馬となった馬と踊り連一行は順次神社参道を踊りながら進む。



鹿児島神宮周辺



馬踊りの様子

神社下の踊り場で馬踊りを披露し、さらに神社本殿前の踊り場で踊りを披露する（昭和六〇年までは始良市加治木町木田の馬だけが本殿前で踊っていたが、現在は奉納馬全てが本殿前に進み踊る。）。奉納終了後は、地元に戻り踊りを披露する団体もある。この日は朝から一日中鹿兒島神宮周辺は初午祭で賑わう。祭り終了は午後三時半ごろとなる。

「鈴懸け馬踊り」は、旧薩摩藩領各地に伝承されている。薩摩川内市新田神社の早馬祭や、いちき串木野市湯之元の馬頭観音祭（春祭り）、宮崎県都城でもジャンカ馬が出る。これらの行事は、鹿兒島神宮の「鈴かけ馬踊り」が伝播し広まったものと考えられる。

#### 【実施時期】

旧暦一月一八日を過ぎた次の日曜日。

#### 【伝承組織】

初午祭の先陣をきって踊るのは始良市加治木町木田集落の御神馬と決まっており、現在では三軒の馬主が一年毎に交代で御神馬を出す。今年は澤崎家、来年は大脇家、再来年は岩崎家の番である。

馬は、「たくっぱ」と呼ばれる轡に結んだ左手綱と後ろ手綱で操られ、三味線、太鼓、鉦のリズムに合わせて頭を上下に振りながら軽やかにステップを踏むように踊る。調教には初めての馬で一月もかかるといふ。慣れた馬は、楽拍子の



写真1 保食神社からお札を貰い御神馬となる

音を聞いただけで頭をふりステップを行う。踊り馬は明け三歳の雌馬が良いと言われる。牡は気性が荒く雌馬の匂いをかぐと走り出すからである。

#### 【由来伝承】

馬踊りの由来は、夢枕説と御神馬奉納説の二説がある。

（夢枕説） 島津貴久公が鹿兒島神宮の改築工事視察の時に、夢枕に馬頭観音が現れ御堂を作り祀ってくれと頼まれた。この話を神宮の桑畑道延と弥勒寺住持日秀上人に話すと彼らも同じ夢を見ていた。これはきつと馬頭観音を祀る寺を建ててくれというお告げに違いないということ、霧島市隼人町獅子尾山に正福院観音堂を建て日頃愛用していた基盤を材として観音像を作り祀ることにした。この夢を見た旧一月一八日を祭日と決め、飾りたてた鈴かけ馬を躍らせたのが始まり。

（御神馬奉納説） 神宮のお祭りに使われる御神馬を飼育していた始良市加治木町木田の人々が、毎年旧暦一月一八日を参拝日と定めて成長した御神馬に金の鞍や鈴をつけ飾り立てて神宮に納めに参っていた。やがてその御神馬の初詣が評判になり、まわりの村々も木田にならない馬を奉納するようになった。次第に鉦や太鼓で囃し立てさらに三味線も加え歌い踊るようになった。

#### 「飾りつけ」

##### 1 踊り鞍

鞍は、荷を乗せる「うせ鞍」と馬車引き用の「馬車鞍」があるが、初午祭用の「踊り鞍」は、特別仕様で、昔は鞍一つが枊四〇俵もかかったという、今に換算すると六一〇万円ほど。馬鞍は、桜花を飾る。これは「春の花」を表わしているという。両側に献上米を示す

初俵をつけ、この俵に御神馬の旗を挿す。

始良市加治木町木田の俵には神宮から受けた一番札を挿す。一番札は木田だけの特権である。

## 2 初鼓

鞍に二本の初鼓（ポンパチ・はつつづん）をとりつける。初鼓の絵柄は御神馬の背に猿が乗っている絵である。



写真2 初鼓

## 3 鈴

昔のものは、土を鋳型加工した土鈴であった。今は市販の真鍮製である。

## 4 髪結び（かんくびい）

飾り用の縮緬の布を両耳に紐で結ぶ。馬は敏感で小さな物音でも暴れ出すので、周囲があまり見えないように遮る役目もある。

## 5 鼻当て

鼻に紋の入った飾り物を当てる。紋は島津家の紋。

## 6 よつかくし

鞍に取り付けた色々な紐や雑多なものを隠すため、藍染めの垂れ布を両方につける。

## 7 衣装・飾り付け

（流れ星）男女とも鼻筋に棒状の白粉を塗る。これを流れ星という。

（男衣装）祭り用のハッピー姿。豆絞りの日本タオルを首に掛けたり頭に巻いたりする。

（女衣装）派手な着物姿に草履履き、元は手拭で頬被りをしていた。

### 「実施内容」

#### 1 平成二八年度 「加治木田御神馬保存会馬踊り日程」

- ・ 神宮との打ち合わせ（一二月九日）
- ・ 馬主へ通知（一二月九日）
- ・ 寄付趣意書発送（一月七日 寄付貰いの二〇日前）
- ・ 道路許可申請（初午祭一か月前）
- ・ 安全祈願祭（一月三〇日 初午祭三〇日前の土曜日）
- ・ 馬の練習開始（二月一日）崎田家厩舎前庭 練習時間、平日午後六時、日曜午後三時から）
- ・ 寄付貰い（二月九日）
- ・ 慰問先へ日程表送付（二月一日）
- ・ 鞍造り、中祝い（二月二一日）
- ・ 女性部踊り練習開始（初午祭四日前）
- ・ 支度揃え（二月二七日 始良市加治木町木田から高井田地区の新築祝い宅や、慰問施設などに午前十一時半から午後五時半まで踊り馬を先頭に手踊り隊が門付踊りをする。）
- ・ 初午祭（二月二八日 神宮での奉納馬踊りが終了したらバスで塩



写真3 踊り連の女性たち

入公民館に行く。錦江地区や本町地区の施設、商店街、新築宅など門付踊りを行い午後六時ごろ木田自興館に帰り着く。

・後片付け(二月二十九日)

・板敷払い(三月六日 初午祭の一週間後、慰労会)

・その後 監査、総会、役員反省会

## 2 平成二八年度の「初午祭奉納団体」

平成二八年度は、二〇団体が

馬踊りを奉納した。奉納団体と踊り人数は、木田御神馬保存会(一二〇人)、馬心会(八〇人)、鹿児島合同厄払(三〇人)、ソーセミコンダクター(二二〇人)、三股町馬踊り保存会(三六人)、京セラ(一〇〇人)、下長飯ジャンカン馬踊り保存会(二〇人)、帖佐中卒業生同窓会(一〇〇人)・始良愛馬同好会(一〇〇人)・妙見石原荘(八〇人)、隼人地区子共会育成会(八〇人)、霧島市シルバー人材センター(二〇〇人)、隼人中平成三年卒厄祓一同(二〇〇人)、日当山温泉通り会(二二〇人)、虎(卯)の後厄祓会(四〇人)、隼人町駅前通り会(八〇人)、日当山中平成三年卒厄祓い一同(八〇人)、霧島市連合青年団(三〇人)、霧島市商工会青年部隼人支部(二〇〇人)、隼人町民芸保存会(二〇〇人)



写真4 人馬一体となった奉納踊り

であった。

## 3 平成二八年の「馬主」

奉納団体は馬主に借用料を払い、鈴懸馬の後に続き踊りを奉納する。平成二八年の馬主は、栗山家(七頭)、種子田家(二頭)、澤崎家(二頭)、徳重家(二頭)、菊野家(二頭)、松元家(一頭)、榎田家(一頭)、徳永家(一頭)、三股花原家(一頭)、都城相葉家(一頭)。

### 【意義】

初午祭の本来の目的は、馬の健康や多産祈願、農作物の豊穰祈願などにあつた。しかし、農耕に牛馬を使わなくなった今日、この祭りの本来の役目は失いつつある。「初午祭」は、農耕儀礼から発した祭りなのだが、今では、神馬を奉納する加治木木田郷を除くと、厄払いや歳祝いの同年齢集団や、商売繁盛を目的とする会社や通里会等の地縁的・経済的集団の祭りへと変化してきた。

早いテンポでも人も馬も一体となり賑やかに踊るこの初午祭は、今でも鹿児島島の春を告げる祭りとして数一〇万人の人出で賑い、鹿児島県下最大の祭りになっている。

(出村 卓三)

16

# いちき串木野市羽島崎神社春祭り

くしきのしはしまさきじんじやはるまつ

〔別 名〕 太郎太郎祭り

〔伝 承 地〕 いちき串木野市羽島

〔実施時期〕 毎年旧暦二月四日に近い日曜日

〔実施場所〕 羽島崎神社

〔伝承組織〕 大字羽島の西側地区の住民

## 〔名称〕

近年は春祭りと言うが、本来は太郎太郎祭りと言う。以前はウケンマツリ（意味は不明）とも言ったが、これは忘れられつつある。

## 〔実施場所〕

江戸時代の羽島村が現在の大字羽島である。いちき串木野市北西部の南西向き及び南向きの海岸に沿って集落が展開する。現在は串木野市街から海沿いに二車線の広い道路が通じているが、かつては山越えの小道しかなかった。羽島のほぼ中央を流れる平身川を境に南方神社を鎮守社とする東と、羽島崎神社を鎮守社とする西に分かれる。この祭りは西の羽島崎神社の春の祭りである。

羽島崎神社は海岸に沿って西の行き止まり地点にあり、背後の山の向こう（西方向）に羽島崎、その先に沖ノ島（灯台あり）がある。冬の北西の季節風が遮られるために、幕末薩摩藩の留学生の出発地となった場所である（現在は羽島漁協の前に記念館が建てられている）。

## 〔実施時期〕

旧暦二月四日が祭日だが、この日に近い新暦三月の日曜日に行われる。平成二九年は三月六日に実施された。



いちき串木野市羽島周辺



太郎が牛を引っていく

### 〔伝承組織〕

羽島の西部地区（羽島崎神社を鎮守社とする。）全体によって行される。後述するように祭りは二部に分かれる。前半は漁村部（浦）の人々による船持ち行事、後半は農村部（在）の人々による田打ち行事である。船持ち行事で歌われる舟歌の人材確保のために船歌祝保存会がある。田打ち行事には保存会はないが、今のところ継続に支障はない。

### 〔由来・伝承〕

現在の羽島崎神社には境内社として菅原神社とゴンザ神社がある。後者は最近ここに建立されたもの、前者は別の地区から遷宮されたものである（時期不詳）。羽島崎神社の祭神は『三國名勝図会』に、天智天皇の後の大宮姫が南薩の頼娃に下る途中この地に立ち寄った際に遺した鏡との伝承が記されている。菅原神社の祭神は大己貴命・少彦名命と言う。

県内の春祭りは神社境内を田に見立ててこれを打つという模擬田打ちと、付随して棒踊りなどが奉納されるといのが通常だが、ここでは田打ちと船持ち行事とが合体している（棒踊りはかつては奉納されたが、現在はない）。もともと合体した形で始まったのか、ある時に合体したのかについては「もともと同じ日にやっていたか」と伝えられるだけでよく分からない。この祭り全体を「ウケノ祭り」とも言ったことが小野重朗氏により報告されているが、その意味は不詳である。

### 〔実施内容〕

**準備** 漁村部の方々は約一か月前から、週二回のペースで舟歌の練習をする。祭り前日は模型の船の点検をし、笹竹を用意する。農村部の方々は田打ちに使う大きなシイの木などを用意する。両方ともに五歳になる男児（長男）の祝いを兼ねている。男児は小豆色か青色の鷹の模様の着物（タカンベジヨ）の上に紋付き羽織を着ると

されるが、現在はそのしきたりは崩れている。当日漁村部では午後〇時半頃より羽島漁協の前で舟歌を歌う。これは春祭り実施に先立って、漁協前のエビス様に奉納するのだといわれる。午後一時頃、神社から田打ち行事を担当する農村部所属の人が漁協前で舟歌が歌い終わるのを見計らって迎えに来る。徒歩で一キロメートルほど先の羽島崎神社へ向かう。

**神事** 午後二時、神社拝殿にて神事が開始される。漁村部と農村部の五歳男児（平成二九年は漁村部は五人、農村部は三人。）も父母に付き添われて正装して参加する。神主は地元在住の梅北家が勤めてきたが、現在は不在なので、串木野市街地の照島神社宮司に依頼している。神事の次第は通常の祭典と同じ。拝殿から急な階段を登ったところに本殿があり、献饌や撤饌の場合は、階段の両脇に参列者が並んで御饌を手渡しする。

**船持ち行事** 神事の最後に本殿の扉が閉められる。いったん神事が終了してから春祭り行事が始まるわけである。舟歌を歌う人々二一〇数人が本殿と拝殿をつなぐ急な階段両脇に並び、神主のお祓いのあと、本殿の扉脇に奉納されている模型の船を、両側から支える形で手渡しで拝殿に下ろす。このとき「ヤースイ、ヤースイ」というかけ声がかげられ、前後に揺らされる。拝殿内の漁村部男児五名がこれを受け取り（父母がサポート）、ゆっくりと境内広場に出る。階段両側に並んで船を手渡した連中は、階段にて長い笹竹を両手に持つ。二列なので真ん中に一本と、両側面に二本の合計三本を持ち、ただちに船歌を歌い始める。先頭の男児五人を先頭に、旗持と一番船（帆はない）を持つ人物の二人が先導する形で、境内を一周して拝殿へと戻る。舟歌連中はそのまま境内を周り続け、歌の終了（約二三分ほど）するのに合わせて、拝殿内に進んで船持ち行事の終了となる。

**田打ち行事** 田打ち行事はテチヨ（父親）と太郎と牛（牛の面をかぶる）の三人で進行する。まずテチヨと太郎が出てきて田の場所を確定する。二人は着物の上に袴をつけ（股立ち）、蓑を着け、頬

かむりし、頭にはバッチョ笠をかぶっている。二人は面白おかしく強い方言で会話をかわしながら作業をする。四隅を決めたところで、五歳児が拝殿から出てくる。神社脇に大きな枝葉のついた椎の木が準備されており、これを五歳児とテチョと太郎がひいて、境内を一周すると、椎の木の股になった部分に手ぬぐいが結び付けられており、これを目印としてカギ（鍬の形）になるように関係者が切り落とす。次にテチョが太郎に牛を引いてくるよう命ずる。テチョと太郎の間答があつて、太郎は神社拝殿後ろに牛を探しに行く。この間、テチョは「タロタロー、牛をとつてケー」と何度も叫ぶ。太郎は戻つてきて「牛はいない」というが、再度探しに行く。そして牛（人が面をかぶっている）を引いてくる。しかし牛はいうことを聞かない。境内にはいつて暴れたりする。テチョと太郎は牛をなだめながら、馬鍬をつけて引かせる。境内を回りつつ、テチョと太郎はしきりに方言で会話を繰り返す。こうして田鋤きが終わると、次は田植。テチョと太郎は田植綱を張り、それに沿って一列となつた五歳児と付き添いが、松葉を苗に見立てて植える。植え終わると五歳児は拝殿に戻り、赤飯の小さい握り飯をもらう。田植の直前に、水口を締める石を踏む動作があるが、現在は田植の後に行っている。以上で田打ち行事が終了する。

**舟歌** 羽島崎神社春祭りを他の春祭りとして特徴づけるのは船持ち行事と、そこで歌われる船歌なので、以下に歌詞を掲げる。歌は数人の船頭（頭）と、その他大勢の水夫（下）の掛け合いで歌われる。冒頭と各節の間と最後に頭「やらめでたいな、ごゆあさめでたいの」、下「エイそらわか枝もエイ栄ゆ」、頭「のいいい」、下「葉も」が歌われるが、左記では省略した。所々で太鼓が打たれる。太鼓を打つ担当者（一人）の家柄は決まっている。

①「年の初めの初夢に」

下「エイきさらぎ山の楠の木を、船に作りて今おろす、エイ白金（しらかね）柱押したてて、エイ黄金のせびをくくませて、手縄水縄（みなわ）に琴の糸、綾や錦を帆にもちて」 頭「嵐吹く宝

の島に乗り込んで」

下「エイよろずの宝積み込んで、エイそなたの倉に納めおく、うれしや」

②頭「伊勢の雀が」 下「ならの渚に巢をかけて何に」

頭「といても」 下「伊勢恋し、うれしや」

③頭「浅間山から」 下「かんばらを見れば」

頭「晒しかねたる」 下「麻布（あさのの）の布じゃ」

頭「ござらぬ」 下「雪じゃもの、うれしや」

④頭「住吉の松に雀が」 下「巢をかけて、さこそ」

頭「雀が」 下「住みよかろう、うれしや」

⑤頭「行けど戻れどこの川は、淀の川瀬のだい川に」

下「エイ二八ヨ川ございちのまに、めさし揃うて船拍子を、さん揃えてしんとろとろとろ、とろいと押し下る、お船遊びをなされるに、おさかずきアヨイ、このこのこの、こんくだ されるやま

と山崎、繁る松山ア、ザンザンザンアヨイ、このこのこの、この船をオ、ござござござ船かいの、エイヨーほんほん、ほんど

おで、どおでえはも」

⑥頭「鞆（とも）と下津井の、あいの白石に出潮入れ潮、巻き揃う

て」 下「芭蕉の引き綱」

頭「もろそぱらいと」 下「切れもせぬかたそ」

頭「がかいの」 下「物思い、うれしや」

⑦頭「長崎の丸山に、そなた首に掛く」

下「花の手拭い手に持ちて、ともの櫓（やぐら）に踊い出て、

さらばさらばと押しまねく、うれしや」

⑧頭「世は平らくと治まるに、ごし繁昌のみもないが」

下「エイ本草もなびく飛ぶ鳥も、君に従い奉る、諸国国々大名の、

エイ館を並べ船続く、門がかいには駒の立てどもなきように、四

方（よも）のかぐめのたまの飛ぶ、光輝く金銀の、エイごこんの

色も増すとかや、きぎいんじょうの楽しむに、エイこの頃ゆか

でこれまさる、うれしや」

でこれまさる、うれしや」

でこれまさる、うれしや」

でこれまさる、うれしや」

でこれまさる、うれしや」

でこれまさる、うれしや」

でこれまさる、うれしや」

でこれまさる、うれしや」

でこれまさる、うれしや」

【意義】

田打ち行事は県内の旧薩摩国側・大隅国側ともに数多くあり、この近くにもいくつも存在している。いずこもほぼ同じように境内を田んぼに見立て、牛が出て田打ちをするというもの。田打ちをする鍬（木枝のマタを利用）をひっかける部分が肥大する地区もある。

太郎太郎（タロタロ）祭りとか次郎次郎（ジロジロ）祭りなどさまざまな名称で呼ばれる。串木野市街に近い深田でガウンガウン祭りと呼ばれるのは、牛の泣き声を模している。春祭りとか打ち植え祭りというのはこれを統一的に把握するための最近の呼称である。だいたい薩摩国側は人間が面をかぶって牛となり、大隅側は模型の牛（車付）が出る。

船持ち行事の舟歌部分は阿久根市浜地区や南九州市知覧町塩屋地区、種子島の西之表市海士泊（あまどまり）でも正月の船祝行事で歌われていたが、現在は規模は小さくなっている。田打ち鍬となったカギは五歳児の家の床の間に飾られる。五歳児の家庭では多くの人々が集まって盛大な祝いが行われている。しかし田打ち行事と合体している例はここしかない。田打ち行事・舟歌行事ともに五歳児（男児）の年祝いが伴っているが、これもこの春祭りの特徴である。

【参考文献】

- ・小野重朗 一九六二 「羽島崎神社太郎太郎祭」 『鹿児島県文化財調査報告書第九集』
- ・鹿児島県教育委員会 一九七七 『鹿児島県文化財調査報告書二四集』
- ・串木野市 一九八四 『串木野郷土史（増補改訂版）』

（松原 武実）



写真3 五歳児による田植え



写真1 本殿から船を降ろす



写真4 太郎が牛を引いてくる



写真2 境内にて船歌の合唱

17

# 本城花尾神社春祭り

ほんじょうはな おじんじゃはるまつ

〔別 名〕本城花尾神社棒踊り

〔伝 承 地〕鹿児島市本城町

〔実施時期〕三月第一日曜日（二年に一回）

〔実施場所〕本城町集落と花尾神社

〔伝承組織〕本城棒踊り保存会

## 〔名称〕

本城花尾神社の例大祭、春祭りでは棒踊り奉納と田遊び行事が行われる。これを「本城花尾神社春祭り」と呼称している。

## 〔伝承地〕

本城町内の四つの集落（荒毛・梅ヶ丸・谷上・谷下）と本城花尾神社

## 〔実施時期〕

花尾神社例大祭（春祭り）は毎年三月五日に近い日曜日に行われるが、棒踊り・田打ち行事は二年に一回行われる。

## 〔実施場所〕

本城集落内の決められた場所数か所と神社の鳥居前、神社境内で「お田唄」、「棒踊り」を奉納する。「田遊び」は神社境内で行われる。

## 〔伝承組織〕

棒踊り保存会が昭和五九年に結成され、「棒踊り」、「お田唄」、「田遊び」など春祭りに関する準備や棒踊りの練習、使用する道具類の



本城町集落周辺



踊りで使用される道具

保存・管理を行う。

### 〔由来・伝承〕

由来・伝承についてははっきりしない。

本城花尾神社の祭神は丹後の局で郡山花尾神社の主祭神は源頼朝公と丹後の局（島津家初代忠久公の生母）である。その丹後の局の分神（丹後の局の魂を分けてもらったとの言い伝えがある。）で、郡山の花尾神社が男の神様・本城花尾神社が女の神様と言われている。

この神社は古くは始良町（現始良市）との境にある高牧山の中腹に祀ってあったが、急な坂で参拝に行くのが大変だったので、元禄以前に現在地に遷したと伝えられている。

春祭りは田植え前の予祝儀礼である「お田唄」、「田遊び行事」などを行う豊作祈願である。「棒踊り」は健康と親睦の目的で江戸期から始まったと伝わり、戦後、一時期中断したが、昭和二三年頃消防団によって復活された。しかし、再び中断し昭和二八年に本城小学校増築の際、棒踊りが復活した。昭和四七年棒踊り保存会が発足し、さらに昭和五八年に本城棒踊り保存会として再結成し、現在に至っている。

### 〔実施内容〕

#### 日習し（ひならし）

一週間前の日曜日に、春祭りで使用する道具類の点検・補修などの準備と棒踊りの練習、特に「田遊び」で使う鍬作りや補修、「柴押し」で使う柴木の切り出しなど年配者を中心に、踊り子関係者・保存会員や集落民の協力により行われる。

#### 春祭り当日の様子

午前八時頃には本城校区公民館に棒踊りの踊り子、青年、保存会役員、歌い手、年配の棒踊り指導者、児童の保護者、料理担当者など関係者が集まり、踊り子たちの着付けや化粧、踊りで使用する諸

道具類の準備、棒踊りの時に立てる「のぼり旗」、「吹き流し」、「提灯」などを公民館前広場に立てる。さまざまな作業を各人が積極的に行っている。

また、踊りに行く前に全員が早めの昼食をとるので、この昼食の準備を女性が行っている。なにしろ人数が多いので料理も大変である。

この日の昼食は、おにぎり、ノリと豆腐のすまし汁、つけあげ、漬け物類が用意された。

この日はあいにくの雨で、校区公民館を出発する時に踊る「打ち込み（お田唄・棒踊り）」を子どもたちは公民館の中で、青年たちは公民館前広場で踊った（写真1）。

その後、予定されていた集落一か所と鳥居前での「お田唄」と「奉納踊り」は雨のため省略された。「お田唄」は「棒踊り」を奉納する場では必ず歌われ、神社境内でも歌い続けられている。

「お田唄」の歌詞は奉納する場により決まっている。「踊り唄」と「お田唄」の歌詞の一部は次の通りである。

・踊り唄

「手踊り」

上 モノノミゴトワ ヨシダノシロヨ  
取 オセロ  
唄 オセロガヤマワ マエワダイカワ

「六尺・三尺」

上 ナエワ コナエデ ヒトモト ナエヨ  
取 ヒトモト  
唄 サナエワ コナエデ ヒトモトナエワ ヨネガ ハチコク



写真1 手踊り

・「お田唄」

八幡山（神社の森が見える所での唄）

上 モノノミゴトワ ハチマン ヤマヨ

取 ヤマタテ

唄 ヤー マサル ヤマタテ マサル シヨシヨモ サカエル

ツイド（鳥居の所での唄）

上 チゴヲトラレタ セイトラレ

タ

取 ツセドノ

唄 ヤー マエデ ツセドノ

マエデ チドロフム メヘス

神社内での行事は次のとおりすべて行われた。

まず、神社に祭り関係者が到着し準備をしている間に、神社への「お賽銭」を保存会の方が「吹き流し」の上に付いている鳩の首に括り付け、拝殿で座って待っている神社長へ渡す儀式が執り行われた（写真2）。

この後、境内で「お田唄」の奉納、続いて子どもたちや青年による「手踊り」「六尺・三尺棒踊り」「鎌と三尺棒踊り」「六人組（六尺棒四人・鎌二人）」が奉納される（写真3）。

奉納踊りが終わると「田遊び」が次のような順番で行われる。

「田打ち」



写真3 境内での子どもたちの手踊り



写真2 おさいせん渡し

子どもたちは棒踊りの服装で頭に手拭いを被り、青年たちの服装

は下が白の半ズボンに黒い脚絆・白足袋で頭に手拭いを被って、全

員木で作った鍬を持ち、田に見立てた境

内を掘り始める。少し鍬を入れる所作を

するのではなく、本格的に木の鍬で力を

込めてひたすら境内を打ち続ける。写真

4のように掘り進め約五〇センチメートル

掘ったところをいったん休憩に入る。

神社の方から配られる「おにぎり」を

祭り関係者、見物人全員が食べる。しば

らくたつと青年たちは「おにぎり」をお

互い投げ合い見物人にも投げる。掘った

穴にも投げられたおにぎりは落ちる。な

ぜ、このようなことをするのか不明で、昔からやっていたとしか伝

わっていない。

「おにぎり」を投げ終わると再び田を打ち始める。しばらく掘る

と今度は青年たちが掘った泥を投げ合い全員退場する。

天気が良ければすぐ近くを流れる川に飛び込んで汚れた手足を洗

う「泥落とし」という行事を行う。しかし、当日は雨のため中止だ

った。

続いて「柴押し」という行事を行う。

これは、神社から鳥居のところまで階段

を駆け下り、鳥居にところに御幣を付け

た柴（イチガシ）を四本立て掛けてある

ので、その木を踊り子たち全員で分担し

て「お田唄」に合わせて、柴木を立て石

段を突き揺らしながら境内まで持ち運ぶ。

境内に持ち上げた柴木は「田打ち」し

たところに持って行き、枝葉を折り次々

に田打ちした中に投げ込む（写真5）。こ



写真5 柴押し



写真4 田打ち

の柴木は肥料のなかった頃、草や木の葉をすき込んで肥料とする「カシキ」である。柴木を大きく揺らしながら枝葉を折り田打ちした中に入れ、大きな枝だけになった柴木は持ち出され「田打ち」行事は終わる。

続いて「田すき」行事が始まる。これは牛引きとモガを使う二人によるアドリブの田園劇で、息の合った二人が面白おかしくやり取りを行い観客の笑いを誘う(写真6)。

#### 「牛洗い」

田すきが終わると拝殿から餅を二枚受け取り、二人でよく働いた牛を餅で洗う。この時も二人のアドリブでの受け答えが観客の笑いを誘う(写真7)。

#### 「種蒔き」

田すきの二人が粃を受け取り田打ちした後には粃を蒔く。この時も面白おかしくアドリブでのやり取りがある。

一連の「田遊び」行事のあと、拝殿前での棒踊り奉納が終わったから、踊り子全員六尺棒のところに集まり「サヤマ」という唄を歌い、最後に鳥居の所で最後の「手踊り」から「棒踊り」までが奉納され、集落の神社長の家と物産館で踊り、公民館前広場で「庭がえし」をして今日の祭りは終了する。「サヤマ」は踊りが終わったということ、神社境内と公民館の「庭がえし」のときの二回だけ歌う。

着替えを済ませ、祭り関係者全員で慰労会が行われる。この時、集落の方が獲ってきたイノシシ料理が振舞われる(写真8)。



写真6 田すき



写真7 牛洗い

#### 「意義・その他」

本城花尾神社春祭りでの「お田唄」、「踊り唄」は、保存会員・協力員により一〇数人で構成され、練習を重ねて本番に備えている。昨今、このような踊りなどでの歌はCDやテープなどによるところが大きい中、生の歌で伝えていることには大きな意義がある。

本城花尾神社の春祭りには、県内の他の地域の春祭りには見られない「柴押し」、「牛洗い」という独特なものがある。

#### 「参考文献」

- ・小野重朗 一九九三 『南日本民俗文化IV祭りと芸能』 第一書房
- ・鹿児島県教育庁文化財課 一九九二 『鹿児島県の民俗芸能緊急調査報告書』 鹿児島県教育委員会



写真8 イノシシ料理

(牧島 知子)

## 田たの神かみもと辰とし

〔別 名〕 田の神講

〔伝 承 地〕 薩摩川内市祁答院町藺牟田麓地区

〔実施時期〕 四月一〇日

〔実施場所〕 薩摩川内市祁答院町藺牟田麓地区

〔伝承組織〕 藺牟田麓青壮年部

### 〔名称〕

「田の神辰し」は、本来は「田の神講」の一部と考えられるが、現在は、行事自体を「田の神辰し」と称している。

### 〔実施場所〕

薩摩川内市祁答院町藺牟田麓地区で行われる。古い座元（宿）から始まり、レンゲ畑や公民館で踊りを奉納してきたが、現在は、特別養護老人ホームや藺牟田池でも踊るようになった。

### 〔実施時期〕

四月一〇日

### 〔伝承組織〕

藺牟田麓青壮年部

### 〔由来・伝承〕

田の神辰しはもともと、田の神石像を一年交替で田の神講のメンバーの家を持ち回る習俗の宿変えの行事の部分指す。田の神石像は、旧島津藩領である鹿児島県全域と宮崎県南西部（旧薩摩藩領）に分布するもので、全国でもこの地域だけの石像である。田の神は「たのかんさあ（田の神様）」と呼ばれ、



祁答院町藺牟田麓地区周辺



レンゲ畑で田の神を囲む

親しまれている。

田の神石像は大きく分けて二種類あり、一つが、田の水口や畦などの屋外に置かれるもの、もう一つが、屋内に置かれるものである。屋内に置かれるものは、「まわり田の神」と言っており、田の神講のメンバーの家を一年交替で回っていくのが通常で、この藪牟田の「田の神戻し」はその宿替の行事である。屋外の田の神石像は「たのかんさあおつ」と言っており、他の集落の御利益のある田の神石像を盗んでもよいという習俗がある。成果があった場合は、お札をつけて返すのが習慣であり、それを「田の神戻し」と言ったが、それが本来の姿ではないかと考えられる。

地元では、田の神は子孫繁栄、無病息災、五穀豊穡の神として信仰されてきた。

### 【実施内容】

平成二九年四月一〇日、当日はあいにくの雨であった。午前十一時に、藪牟田藪集落のK邸を訪ねた。K邸は、これまで一年間田の神を預かってきた宿の家だ。既に、昼食の準備が整えられ、地元の方々が集まっていた。

雨のため、田の神を乗せる竹籠は車庫の中に用意されていた。田の神石像は、床の間に鎮座していた。藪集落の持ち回り田の神は、高さ五九センチメートル、幅三三センチメートル、右手にめしげ（しやもじ）を持ち、左手は掌を前に向けている。着衣には九十の紋が入っている。新たに化粧をし直し、白く塗られた顔に紅をさす。

昼食が済むと、田の神石像を籠に乗せる準備が始める。田の神を籠の中の座布団の上に乗せ、安定させる。三々五々、集落の人々が花を持ち寄る。ヤマブキ、山桜、菜の花、ツツジなど季節の花を籠の廻りに刺して飾りにしていく。また、田の神石像の周りには、「田の神もち」と呼ばれる小豆を混ぜた餅を藪

筒（わらつと）に包んだものや、焼酎の入った竹筒が藪縄で取り付けられる。

今回は、雨が降っていたので、ビニールで雨よけをするなど、いつもとは違うしつらえも行われた。

また、踊り手達も、倉庫など雨に濡れない所で準備を始める。踊り手達はヘグロ（煤）で顔を真っ黒に塗る。その上から目の周りを白くするなど、思い思いに模様を描く。麦わら帽子をかぶり、その上から風呂敷などの色鮮やかな布で麦わら帽子が落ちないように固定する。鹿児島県内の多くの田の神舞で、頭にシキを被ることを考えると、この麦わら帽子も、以前はシキだった可能性も考えられる。浴衣にたすき掛け、袴にはさらに浴衣の帯のような布を長く後ろに垂らす。下は袴、足には地下足袋を履く。こうして誰だか分からないようにし、神様の分身になるという。実は、調査者の知人も踊り手の一人だったのだが、どれが彼なのか全くわからないほどであった。

舞い手は手には「ヘノコ棒」と呼ばれる棒を持っている。棒の先端にはシユロの皮が着けてあり、箒のようになっていく。



写真1 田の神を籠に乗せる



写真2 ヘノコ棒

シユロの部分も含めて棒全体も真つ黒に塗られている。

元の宿を出発する際に、庭で踊りを奉納する。法螺貝と鉦と歌のお囃子で、大きな身振りで踊る。

踊る際は、田の神石像の乗った籠を中心に置き、輪になって踊る。籠には、幟を立てる。幟には「田の神さあー」と大きく書かれ、小さく「五穀豊穰」、「無病息災」とある。また赤字で「子孫繁栄」とあり、「薩摩郡祁答院町藺牟田麓地区」となっている。すでに平成一六年に合併して薩摩川内市の一部になっているが、祁答院町時代からの幟をそのまま使っている。

踊りが終わると、たのかんさは一年間過ぎた宿を後にする。現在は、軽トラックの荷台に載せられて移動していく。前にも記したが、現在では、踊る場所は新たに藺牟田池や福祉施設などが増えたが、今回は雨のため省略され、宿の後はレンゲ畑に移動した。

レンゲ畑は、もちろん田んぼの肥料とするためにレンゲの種が蒔かれた田のことだが、決まった場所があるわけではなく、



写真3 元宿の庭で踊る



写真4 籠に乗って移動する田の神

その年にレンゲがよく咲いている田を選定して、そこで踊っているという。ここでも、先程と同様に、田の神石像を中心に輪になって踊る。雨の中で、また四月とは言え気温も低く、踊り手もつらそうであった。

しかし、省略することなく、雨のレンゲ畑で踊りきった。この後は、麓公民館での踊りの奉納となる。少し離れたところで、軽トラックを降り、鉦を打ち鳴らしながら、公民館まで行列を作って行く。見物人などは、踊り手達が顔に塗っているヘグロを塗られる。ヘグロを塗られると一年間無病息災に過ごすことができるという。これも、日本中あちこちでよく見られる祭りの風景である。

公民館には集落の方々が集まり、各班毎に田の神石像の籠についた竹筒の焼酎と田の神餅をいただく。この日に地区の総会が行われ、その場で田の神と踊り手達が到着するのを待っているのだと言う。公民館では、畳を上げて板の間になった場所です、やはり中心に田の神石像と籠を据えて、所狭しと踊り手が大きな所作で踊る。今年も、雨で濡れて重たくなった着物から湯気が立ち、軽やかで明るい



写真5 レンゲ畑で田の神を囲む



写真6 次の宿の庭で踊る

いつもの雰囲気とは違った迫力にあふれた踊りとなっていった。踊りの輪の中には、かつての踊り手であったであろう男性や、また女性も加わり、代わる代わるに踊っていく。

最後は、新しい宿に到着し、その庭で踊り、田の神石像をうやうやしく、床の間に据える。雨が降っていたので、新しい宿では座敷にブルーシートを敷いて待っていた。本来はここで踊り手達は風呂を頂き、饗応をうける。この日も料理と酒が用意されていたが、踊り手達は、それぞれの家に帰り、風呂に入る。昔風に着替えを用意をしてきていた踊り手もいたが、彼も皆に従い、帰途についた。

### 「意義」

田の神講における回り田の神像の家移りの中でも、祁答院町の藺牟田地区の「田の神戻し」は、花に彩られた美しさにおいて他に類を見ない。田の神講自体が廃れたところが多く、回り田の神像も回ることを辞めてしまい、集落の方でも田の神が今、どの家にいるのかが分からないことが増えている。そのような現代において、田の神講と田の神の家移りが盛大な行事として伝承されていることは貴重である。これは、盛大であったが故に残そうという地域の思いが強かったのだと思われる。

この地域では、文献や石碑などから江戸時代の田の神講の様子も伺える点でも貴重だといえる。また、「田の神戻し」という名称から、「タノ



写真7 新しい宿の床の間に据えられた田の神を引き渡す

カンサーオットイ（田の神盗み）」との関連も伺われ、旧島津領内における田の神信仰と田の神石像、田の神講との関連を考える上で貴重な文化財だと言える。

### 「参考文献」

- ・黎明館 一九八七 『黎明館企画特別展「田の神」展示図録』
- ・祁答院町 一九八七 『祁答院町の石造文化財』 祁答院町
- ・祁答院町 一九九〇 『祁答院町の文化財』 祁答院町
- ・牧山望 一九七三 『祁答院藺牟田郷誌』 藺牟田郷誌刊行会

（小島 摩文）

ひな女祭りじよまつ

〔別 名〕いのち長なが

〔伝 承 地〕阿久根市西目佐潟地区

〔実施時期〕旧暦四月八日

〔実施場所〕佐潟地区漁港広場

〔伝承組織〕佐潟ひな女まつり保存会

## 〔名称〕

「ひな女祭り」と称している。かつては「いのち長（なが）」と呼ばれていた。「ひな女祭り」にしても「いのち長」にしても行事の名称としては、他に類例がないのではないかと思われる。

## 〔実施場所〕

佐潟地区漁港広場で行われる。

## 〔実施時期〕

旧暦四月八日に行われている。調査時の平成二九年は五月三日であった。

## 〔伝承組織〕

佐潟ひな女まつり保存会が組織されている。佐潟の区長が会長を兼ねており、佐潟地区全体で祭りを支えている。

## 〔由来・伝承〕

かつては佐潟出身の長男である男性の長女だけが「ひな女」として祝われたという。この祭り自体江戸時代からあったと伝承されているが、他に類例を見ない点、また、踊の伴奏の歌が阿久根ハンヤ節である点



佐潟集落周辺



祖母と今年のひな女

などを考慮すると比較的新しい祭りではないかと思われる。

また、実施日が旧暦四月八日というのも、祭りの内容と日にちの意味合いとの関係があまり見えてこない点もある。

地元の伝承では「いのち長」という名称でもわかるように、子孫が増加し繁栄するように、その家に生まれた長女を背中に背負い踊る、という。

### 「実施内容」

午前八時から準備が始まる。佐潟地区漁港広場には、いくつものテントが張られ、見物ができるようにしつらえられ、広場の上を万国旗が彩る。会場には、これまでの「ひな女」たちの幟が色とりどりにはためいている。全部で二一本ある。幟にはひな女祭りの年度、「ひな女祭り」のタイトル、ひな女の名前、生年月日、そして、一番下に父母、祖父母の名前が並ぶ。ただし、祭りの年度が入るようになるのは平成一四年度から、生年月日が記載されるようになるのは平成二二年度からである。平成二二年度は近年では最も多い四人のひな女がいた年で、残念ながら雨だったため佐潟集会施設の中で行われた。

幟は個人で作るのではなく、地区でまとめて作成しているようで年度ごとに違いはあるものの共通したフォーマットで作成されている。会場に張られていた式次第は左記のようになっていた。

### 平成二九年度ひな女まつり

#### 式次第

- 一 開会のことば
- 二 ひな女紹介
- 三 開会のあいさつ
- 四 祝金の贈呈
- 五 来賓祝辞
- 六 乾杯

#### 七 謝辞

#### 八 余興

#### 九 閉会のあいさつ

#### 一〇 万歳三唱

このうち、八の「余興」がひな女祭りの最も重要な踊りの部分である。

来賓には、阿久根市長、阿久根市教育長及びこの地域が選挙区の国會議員(代理で夫人が出席)などで、この祭りが地区にとっても市にとっても重要であることがうかがえる。

昭和四九年に初版が出版された『阿久根市誌』では、ひな女祭りを次のように紹介している。

#### 佐潟の「ひな女」祭り

佐潟部落に、いつごろから始められたものか不明であるが、「ひな女」祭りがある。

旧暦の四月八日、釈迦如来の誕生日に行われるもので、最近は五月八日に行われることもあるという。

この祭りは、一般には「いのち長」とも呼ばれ、子孫が増加し繁盛するようにとの願いを込めたものといわれている。

それは、家が栄えることを意味し、家が栄えることは、女が丈夫に育ち沢山の子どもを産むことに始まるとして、女兒だけに行われる祭りである。

当日は、部落中が総出で祝うもので、その年の出生女兒が多い時は、会場を二、三か所に分けて催し、各家ごとにごちそうの弁当を作って会場に出る。

会場には、祝福を受ける一歳前後の女兒が晴着で飾られ、親戚や近隣の人々から祝が贈られ、また部落からも各人ごとに祝儀が出される。

会場は、昼過ぎになると踊りがは始まり、一段とにぎやかになって来る。

この踊りの第一陣が「ひな女」の踊りになるのである。

それは、祝福を受ける女兒が真っ先に祖母に背負われ、踊りの場に出るのである。この祖母は、孫娘を背中合わせに背負い、その顔が観衆によく見えるようにして踊るのである。

こうして、祝福された女兒たちは、夕刻になるまで背負われて踊られ、夜になると更にその家で祝いは続けられる。

最近との大きな違いは、やはり「ひな女」の人数だろう。具体的な数は明示されていないものの、複数の会場に分けるといえるのは相当な人数であろう。また、「各家ごとにごちそうの弁当を作って会場にでる。」というのも近年のものとは様子が違う。

調査当日、平成二九年は、ひな女は一人であった。本来は地区に住んでいる地区出身の長男である男性の長女がひな女になるのだが、今回は、地区には住んでいない地区出身者の男性の長女がひな女となった。午後一時二〇分頃から佐潟集会所の畳の間

でひな女の晴着の着付けが始まった。ひな女の母親も母方の祖母も和服である。午後二時から会場横の建物で、ひな女の支度の仕上げをする。名前を染めた手ぬぐいをはちまきにして頭に巻く。はちまきは普通の幅ではなく、一五センチメートルほどで、名前がよく



写真1 今年のひな女



写真2 祖母におんぶされるひな

見えるようにする。

いよいよ式次第に従って、会が進行していく。開会の宣言後、ひな女と両親とが紹介される。

この後、踊りへと移るが、まず最初は母方の祖母がひな女を背中合わせに背負って一人で踊る。

続いて、父方の祖母が同様に一人で踊る。

会場の周りには三〇〇人ほどの人々が思い思いに座ったり立ったりままで祭りを見物している。

祖母二人の踊りの後は、ひな女の叔母にあたる一人がひな女を背負い何人かで踊る。

その後、叔父など何組かが踊った後、ひな女をその母が背負って踊る。この時は、祖母の時と異なり、母親を先頭に父親、母方の祖母、祖父などが続き、列を作って会場を回って踊る。

その後も、校区の小学校の児童の踊りなど幾組かの人々が代わる代わる踊る。そのうち、来賓で来ている阿久根市長も踊り、国会議員夫人も踊りの輪に加わった。

午後三時頃、ようやく踊りは終わり、閉会の挨拶があり、万歳三唱して祭りは終了する。

### 【意義】

阿久根市西目佐潟のひな女祭り



写真3 両親も踊る



写真4 近隣の小学校の児童と教職員

は、女兒の誕生を祝い、その健やかな成長を願う祭りである。そして、重要な点は、家単位で行われるのではなく、集落をあげて盛大に行われる点にある。これは、女兒（ひな女）の地域へのお披露目であり、地域への加入儀礼でもある。

男児のこうした、地域社会へのお披露目の儀礼はさまざまな形で存在しているが、女子のこうした祭りは他に例を見ないのではないだろうか。筆者は、寡聞ながら知らない。

日本各地で行われている三月三日のひな祭りは新暦であれ、旧暦であれ、家族内あるいは広くても親戚内の行事である。それに対して、この阿久根のひな女祭りは地域での祭りで、現在も市長や国会議員の代理も参加する祭りである。

近年は、対象になるひな女が居ない年もあるようであるが、地域のためにも是非続けてほしい祭である。今後は、類似の行事の有無も含めて、由来やいつ頃からあるのかを調査する必要があるだろう。

#### 【参考文献】

・阿久根市誌編さん委員会 一九七四『阿久根市誌』阿久根市

（小島 摩文）

〔別 名〕 ガラガラ船祭り

〔伝 承 地〕 南さつま市坊津町泊

〔実施時期〕 毎年五月五日

〔実施場所〕 泊久玉神社・泊浜

〔伝承組織〕 泊公民館

### 〔名称〕

南さつま市坊津町のガラガラ船（カラカラ船）は、舳先に付けた綱を引っ張って遊ぶ、郷土玩具の車付き帆掛け舟。泊地区では、こどもの日のイベントとして、「唐カラ船祭り」を催している。

昭和四九年、工芸品としてのこの玩具の名称に「唐カラ船」を用いるようになり、昭和五二年第一回の「唐カラ船競争大会」を開催した。その後、「唐カラ船祭り」の名称を用いるようになった。

この玩具の名称は、それまでカラカラ船又はガラガラ船と呼ばれていた。

### 〔実施場所〕

唐カラ船祭りになってからは、泊公民館から、久玉神社くだまへ宮参りし、神社でお祓いを受けた後、境内で競争。その後、泊浜に出て、浜で再びガラガラ船を引く。それ以前にも、端午の節供には、泊浜に出て子どもたちが引くものだったと言う。

### 〔実施時期〕

現在は毎年五月五日のこどもの日。二〇一七年は午後二時半に公民館を出発した。祭りが始まった頃は、月遅れの端午の節供に近い日曜日として旧暦六月第一日曜日になっていたが、梅雨の時期で雨も多いの

で、



図1 久玉神社への宮参り経路・泊浜位置図



写真1 唐カラ船祭りの宮参り



写真2 泊浜でガラガラ船競争

平成五年から新暦五月五日に開催するようになった。

### 「伝承組織」

泊区の行事として、公民館執行部・女性部・子ども会育成会で実行委員会を作って実施している。

祭りには特に参加資格はなく、泊以外の子どもでもガラガラ船を引くことが出来る。二〇一七年は二五人の子どもたちが参加した。

かつては坊地区でも、海岸沿いの集落では引いていたという。同じ坊でも鳥越など山手の集落のどもたちは、引かなかったようだ。

### 「由来伝承」

唐カラ船の名称を用いるようになったのは、先に記したように昭和四九年からで、祭りは昭和五二年の「唐カラ船競争大会」から続いている。集落役員によれば、かつて子どもたちがそれぞれ浜に出て引いていたのが見られなくなり、伝統行事の存続を願い、祭りとして「復活」させたものだという。

### 「実施内容」

#### 1 唐カラ船祭り

午後二時に泊公民館に集合して、午後二時半に公民館を出発。行列を組んで約二〇分かけ、「ハンヨーイ、サーサー」の掛け声で国道二二六号を久玉神社に向かう。神社では、午後三時頃から稚児のお祓いがあり、奉納踊り「奴踊り」に続いて、境内でのガラガラ船競争が行われる。泊浜へ移動し、午後四時頃から浜での奉納踊り・ガラガラ船競争・餅撒きを行って終了する。荒天で浜での行事ができないときは、神社で餅撒きをして終了となる。

公民館から神社へ向かう「宮参り」行列の順番は、①区総代、②男子（ガラガラ船）、③久玉神社宮司、④大船、⑤奴踊りの踊り子（女子）、⑥お囃子（区女性部）と続く。男子は、浴衣に新聞紙で作った手作りの兜を被る。実測した兜は幅三六センチメートル、高さ一九セ

ンチメートルで、真ん中に目の丸に見立てた赤い色紙が貼ってある。兜の作り方は昔から同じだったと言う。行列の「大船」には昔は大・中・子ども用があった。今は「中」はない。ガラガラ船の形をそのまま大きくしたような模型船で、「大」は長さ四メートルほどあり、集落役員数人で引く。三味線・太鼓の囃子は、「道楽」と呼ばれる。

久玉神社では、拝殿にガラガラ船を持った子どもたちが並び、宮司から「稚児のお祓い」を受ける。神事のあと、境内で奉納踊りがある。演目は、女子による「奴踊り（①高い山から、②丹波ササ）」、③「道楽」、婦人部による、④「ハンヤ」の順。三日ほど練習し、二〇一七年は坊津学園の一年生二人も初参加した。それが終わると鳥居そばに五人一組で男子が横一列に並び、境内でガラガラ船競争となる。ルールは特になく、船を引いて、境内を駆け抜ける。競争は数組行われ、転倒する男の子や泣き出す子もおり、にぎやかでほのぼのとした競争である。

神社での競争が終わると、泊浜へ降りて、再び女子による踊り（神社と同じ踊り）が披露され、男子の競争がある。昔ながらの浜でのガラガラ船引きは、端午の節供の伝統行事として風情がある。最後に海上の漁船からにぎやかに餅撒きを行い、祭りが終了する。

唐カラ船祭りが終わると、ガラガラ船は、自宅で飾っておく。

#### 2 ガラガラ船

ガラガラ船は、遊びの少ない時代に、端午の節供に男子の成長を願って、家族が作ってくれたものと言う。父は忙しいので、主に祖父が作ってくれた。漁師の家だけではなく、男子がいるところはどの家でも作ってもらえた。この船は、毎年作り変えるということはない。船大工に頼むわけではなく、各家で手作りした。兄から譲られたりすることもあるが、兄弟げんかになるといけないので、兄弟それぞれに作ってもらえたとする。

細工がしやすいので、杉材が用いられている。昔はヒノキを使ったものもあったと言う。帆は古くなった着物の切れ端を使い、昔はもっ

と素朴だったと言う。ガラガラ船は、三枚の杉板による船体、四つの車輪、そして帆柱で構成される。船体は、竜骨に相当し背骨となる中央の板と、左右の舷側板とを、前・中・後三か所の横木でつないでいる。中央材の船首部には様々な絵が描かれ、紐で船首飾りがつけられている。ここにロープを結んで、男子が引く。舷側板はイサバ船や弁才船の「はぎつき」を表すようにも見える。帆柱の頂部から船首と船尾に向けて紐が渡され、それにサイノコと呼ばれる布飾りがつけられている。

サイノコ(猿の子)は船員を表すともいう。「昔、カツオ船が嵐にあったとき、どこからか猿の子がやってきて、帆を降ろしてくれた。船の守り神」だと伝えられている。

ガラガラ船は、実測したものは、船の長さ五五センチメートル、幅二二センチメートル、舷側の高さ一四センチメートル。帆の幅は三二センチメートル、高さ三六センチメートル。坊津歴史資料センター輝津館<sup>きしんかん</sup>で平成二九(二〇一七)年に開催された「坊津ガラガラ船・カラカラ船企画展」で実測したところ、小さいものは長さ四〇センチメートル×高さ四〇センチメートル、大きいものは長さ六五センチメートル×高さ八〇センチメートルあった。サイノコは最も大きいもので八センチメートルで、細長い布袋を裏返し、中に詰め物を入れてある。ガラガラ船は、平成二九(二〇一七)年三月に鹿児島県伝統的工芸品に指定され、この企画展では民芸品として長さ二〇センチメートルほどのミニチュア船も展示されていた。

今の唐カラ船祭りでは船を引いて競争させるが、昔は、「風が出てくると浜に出ていき、帆をなびかせて競走した。引っ張るのではなく、浜風で走らせるものだった」と言う。

### 3 節供の習俗

泊では、「鯉轍りを上げると風が吹く」と昔から言っていて、鯉轍りを上げなかった。その代わりにガラガラ船が、端午の節供の子どもたち

の楽しみだったと言う。

端午の節供の伝統食に、トウジンマツ(唐人粽)がある。種子島・屋久島のツノマキ(角粽)と同様に、モチ米を竹皮で三角形のおにぎり状に巻き灰汁で炊いたもの。泊ではアクマキはあまり作らず、ドウジンマツのほうを作る。他にフツのダゴ(よもぎ団子)・マメンダゴ(豆団子)もよく作ると言う。

桃の節供を泊ではサンガンノセツと言って、月遅れの桃の節供(四月三日)に、お弁当を持って浜に出る行事があった。

#### 【意義】

鹿児島には模型船を用いる春の行事がいくつかある。いちき串木野市羽島崎神社春祭りのフナモチ習俗と、日置市吹上町船木神社の船漕ぎ祭りである。

羽島崎神社のフナモチでは五つの祝いとして、五歳になる男子が、父親の介添えで刳り船状の帆掛け船や機帆船・動力船の模型船を持って境内を回る。羽島の浜地区も漁村集落であり、男子の成長を願う習俗として、ガラガラ船の意義と通じるものがある。

一方、船木神社の船漕ぎ祭りは、境内で氏子が模型船を順次渡していく。船木神社は、やや内陸部にあり、猿田彦神・大山祇神を祀る。この習俗から、ガラガラ船のサイノコが、木造和船の造船に伴う、山と海との交流を示しているとも考えられる。

サイノコと同じ形状の飾りは、桃の節供にみられる下げもの(つるし雛)の飾りとも通ずる。こちらは女子の成長を願う。

車付き舟の玩具には、捕鯨の盛んだった土佐や紀伊の鯨船・鯨車がある(帆はついていない)。しかし坊津のガラガラ船は、今は漁村にもかかわらず、立派な帆をつけた弁才船やイサバ船と呼ばれた運搬船を模したものである。かつて海運が盛んだったころの帆船の姿を、今に伝えているようだ。

(井上 賢一)



写真5 泊浜でのガラガラ船競争



写真3 久玉神社での稚児のお祓い



写真6 ガラガラ船



写真4 久玉神社境内のガラガラ船競争